

西アフリカのジュラ商人

— その系譜についての考察 —

原 口 武 彦

- I はじめに
- II ジュラ商人の起源と系譜
- III 植民地化前(14~19世紀)のジュラ系商人
- IV おわりに

I はじめに

1. 本稿の課題

西アフリカ、コート・ジボワール国の首都アビジャン。商人たちの朝は早い。午前6時、まだ夜のあけやらぬ薄暗がりのなか、トレッシュ・ヴィルの市営市場(注1)の周辺では、黒い人影がうごきはじめる。ヤム芋、キャッサバ、プランテン・バナナなど根茎類主食作物、米、ミレット、メイズなどの穀類(注2)、トマト、ピーマン、オクラなど野菜類、スンバラ、ミソなど種々の調味料、香辛料、食肉類、日用雑貨、などなど、それぞれ品目別に大まかに仕切られた各コーナーに商品が運びこまれ並べられる。そして午前8時、熱帯の朝の太陽の光が肌に強く感じられる頃になると、客の出入りがはじまり、それから午後2時頃まで人ごみと喧騒の中で活発な商いが展開されることになる。

1950年代からはじまった高度経済成長にもないアビジャン市の人口は急速に増大し、今日、100数十万に達している(注3)が、このアビジャン市の市民の食糧をはじめとする生活必需品の大半は、アビジャン市内の各所に設けられたこのような市場を通じて供給されているのである。市場の周辺には主にレバノン・シリア人が経営する小売店の店舗がならび、また最近では外国資本系のいわゆるスーパー・マーケットの進出もめざましい。しかしそこで取扱われている商品は、おおむね相対的に高価な輸入品であり、アフリカ人庶民の台所をまかなう地場産の食料品などは、上記のような市場を通じて供給されている。市場付近の裏通りには、農村部で買付けた食糧をアビジャン市に運び入れ、市場の小売商人にそれを供給する問屋が散在している。このような卸売業を営んでい

る商人は、アビジャン市では一般にジュラとよばれている。

ここ20年来のコート・ジボワールの高度経済成長の過程で、首都アビジャン市を中心とする流通機構は、簡単に図式化していえば二重の系列を形成しつつ発展してきたととらえられる。すなわち、その第1はコーヒー、ココアなどの輸出品と外国からの輸入工業製品という国際商品の流通をになうフランス系商社とそれに結びつくレバノン・シリア人商人の系列であり、この系列のルートは、植民地体制のもとで形成され、独立以後も政府の若干の干渉・規制をうけながらも基本的には今日まで存続している。その第2は、この20年来の経済成長の過程で、上記の第1の系列を補完するかたちで、アビジャン市を中心に急増する都市住民の生活を賄う食糧など主として地場商品の流通の担い手として抬頭してきたジュラ商人の系列である。

コート・ジボワール政府当局の立場からみると、上記の国際商品の流通を担う第1の系列のルートは機構的にも整備されている点で、国家の規制、干渉が容易である。事実、独立以後、政府はコーヒー、ココアの生産者価格の規制、買付け業者の認可制など、さまざまな政策的干渉を実施してきた。しかし、第2の系列の流通ルートは群小のジュラ商人たちを担い手としていわば自生的に生成、発展してきたものであるだけに、政府が流通機構の整備、近代化の名のもとに彼らの活動を規制しようとする政策は、少なくとも今日までのところ成功していない(注4)。

コート・ジボワールの流通機構の第2の系列のルートの担い手であるジュラ商人は、フランス人、レバノン・シリア人商人との関係で土着的であり、また国家の直接的保護をうけていないという意味で自立的である一つの経済勢力とみなすことができよう。彼らは、主に国家および外国資本の手で推進されつつある今日のコート・ジボワールの経済開発の過程でどのような利害関心を持

ち、どのような役割を演じつつあるのか。

本稿はこのような問題関心にもとづいて、とりあえずこのジュラ商人が西アフリカの歴史の中で、どのような過程を経て形成されるにいたったのか、その系譜について考察することを目的としている。

2. 研究状況

独立以後のコート・ジボワールの経済成長の過程におけるジュラ商人の活動に着目し、これを検討した文献は皆無に近い。筆者の知るかぎり、この問題を直接とり扱ったものとしては、のちに紹介するB・ルイス(Barbara Lewis)の論文(註5)があるだけである。しかし、彼らの歴史、とくに植民地化前の西アフリカ各地におけるジュラ系商人(のちに詳述するように、今日のジュラ商人に系譜的に関連があるとおもわれる植民地化前に活動していた商人グループを広くジュラ系商人とよぶ)の活動状況については、近年、主に欧米の研究者の手になる研究成果がかなり多く発表されている。それらはいずれも、以下にのべるような西アフリカ研究の最近の潮流に属するものである。

それは、経済史的関心および経済人類学的関心にもとづく研究と概括できる潮流である。1969年シェラ・レオンの首都フリー・タウンで開催された第10回国際アフリカ・セミナーの成果として上梓された『西アフリカにおける土着的商業と市場の発展』の編著者、C・メイヤサーは、その「序論」でこのセミナーの研究関心を概括して次のように述べている。

「交易と市場に関する諸問題を研究している点で、このセミナーは社会人類学の新しい発展の方向に沿ったものである。これらの諸問題は、人間科学の研究者たちからは長い間、無視されつつけてきたが、初期のアラブ人、ヨーロッパ人探検家たち、および植民地行政官たちのつねに関心の中心であった。今日、この交易の問題について科学的な視角にもとづく関心が再生したことは、以下のような点で重要である。まず第1に、そのことによって人類学は……この文脈では機能的であるよりも観念的にみえる諸制度に基礎をおく一見、孤立的な諸社会の研究に過度に集中していたことから解放される。第2に、このような関心は、少数の人間集団に限定されたものでなく、新たにせまりくる状況に自らの諸制度を適応させる必要に直面した数百万の人々全体にかかわる一つの過去の歴史を明らかにする。……さいごに、それはアフリカ経済とヨーロッパ経済との間の有機的な関係——それはそもそものは

じめから単なる二重性の関係であったわけではない。——を明らかにする」(註6)。

これは、従来の欧米の西アフリカ研究において支配的であった古典的な社会人類学的研究に対する方法的な批判意識にもとづいて形成されてきた研究の潮流であるといえよう。ごく単純化していえば、従来の社会人類学的研究にあつては、植民地化前の西アフリカの伝統的社会には「経済」は存在せず、かりにその存在が認められるにしても、それはその社会にとって周辺的な意義しか認められなかったということである。そして、西アフリカの諸社会は、自給自足的段階にある一つの孤立した小さな共同体としてとらえられ、そこでの親族関係の態様などに研究関心が集中していたのである。

しかしのちにのべるように西アフリカでは、8、9世紀頃に形成されたとされる古ガーナ帝国の時代から、サハラ砂漠を縦断する長距離交易が行なわれており、またそれ以降、サバンナと南部森林地帯との間にも、岩塩、金、コーラの実などを主要交易品とする長距離交易が19世紀末の植民地化の前夜まで拡大、発展してきたのである。これらの交易は、従来孤立した存在としてとらえられている諸共同体をつなぐ糸のような役割を果たし、それらに一定の影響力を及ぼしてきたものと考えられるのである。この諸共同体間に存在した商業、市場に注目することによって、従来の研究の枠組をとり払い、研究状況に新風を注ぎこもうとするのが、上記のセミナーに代表される最近の研究関心であるといえよう。このような文脈で、植民地化前の西アフリカ(とくにその西域において)の長距離交易において、広大なネット・ワークを形成して活動していたジュラ系商人が注目されることになってきたわけである。

古典的な人類学の研究対象として治外法権的に確保されていた西アフリカの伝統的社会に経済的な視角をもちこもうとする点では、上記のメイヤサーに代表される経済人類学的関心と、『西アフリカ経済史』(註7)を公刊したA・G・ホプキンス(A. G. Hopkins)に代表される経済史的関心とは共通しているが、その経済のもちこみかたには両者の間に若干のニュアンスの差異があるようにおもわれる。メイヤサーの場合には自覚的にマルクス主義的方法に依拠してそれを西アフリカのいわゆる伝統的社会に方法的に適用しようとしているのに対し、ホプキンスは一つの経済発展論の立場から植民地化前の西アフリカ社会という対象そのものの中に、その後の経済的発展の萌芽的要素を発掘しようとしているのである。

メイヤスは、古典的な社会人類学に批判的意識を持ち、マルクス主義的方法をもって社会人類学の領域に進出しようとしているわけである。マルクス主義が今日までこの領域にほとんど手を触れずにいたこと自体については、既存のマルクス主義的方法に内在する一つの欠陥であると彼は意識しているようである。したがってメイヤスは、西アフリカのいわゆる伝統的社会についての自分の研究を、マルクス主義の継承、適用、さらにはその創造的な発展をめざすものとして位置づけている(注8)。

他方、ホプキンスの場合は、従来の西アフリカ経済発展論のほとんどが西アフリカにおける近代経済史の起点を19世紀末の植民地化においている点に疑問を投げかけている(注9)。ホプキンスはこの前提をとり払い、それ以前の西アフリカにすでに次の時代につながる自生的な経済発展の萌芽が存在していたことを実証的に示そうとしているのである(注10)。

いずれにしろ以上に概括したような欧米の西アフリカ研究の最近の潮流の中で、アラブ人旅行者、ヨーロッパ人探検家、初期の植民地行政官らが書き残した文献資料、あるいは現地での古老たちからの聴き取り調査などにもとづいて、植民地化前のジュラ系商人の活動を再構成すること自体、一つの市民権をえた研究テーマであり、事実、まだまだ断片的であるとはいえその成果が発表されつつある。

本稿ではまずそれらを援用してジュラ商人の歴史を概観する。筆者の関心は、すでにのべたように独立以後のコート・ジボワールの経済発展という今日の文脈の中で新たに抬頭し活動しているジュラ商人にあるわけであるが、彼らはこの新しい状況の中で忽然と姿をあらわしたわけではなく、西アフリカの長い歴史の中で培われてきた商業的伝統を基盤として抬頭してきたのである。その意味でジュラ商人の系譜を辿ってみることは、今日の文脈における彼らの性格、役割を考察するためにも必要であるようにおもわれる。さらにジュラ商人に焦点をあて西アフリカの歴史を辿ってみることによって、西アフリカ史の特質の一端を浮び上がらせることができるのではないかということも筆者としては期待しているわけである。

以下、本稿の構成は、まずジュラ商人の定義について第Ⅱ節で論じたのち、第Ⅲ節では、古ガーナ帝国時代から植民地化前夜までの数世紀間に、西アフリカ西域の各地で長距離交易商人として活動していたジュラ系商人について検討する。

(注1) コート・ジボワールの急速な経済成長にともない首都アビジャン市も急速に外延的に拡大しつつあるが、トレッシュ・ヴィルは、市の中心部分に独立以前から存在していたアフリカ人居住区である。アビジャン市にはこのような市営市場が市内10数カ所に設置されているが、トレッシュ・ヴィル市場は、新興のアジャメについて第2の規模を誇る。ちなみに少々数字は古いが1971年の調査によれば、各市場で活動している小売商の数は、アジャメ 628 人に対してトレッシュ・ヴィルは349人となっている。Ministère du Plan, *La commercialisation de produits vivriers, étude économique*, 第1巻, *Rapport*, 1972年, 73ページ。

なお、本稿のトレッシュ・ヴィル市場の情景の描写は、筆者自身が1976年1～2月に行なった現地調査における観察にもとづいている。詳しくは、原口武彦「アビジャンのパナ市場」(『アジア経済』第17巻第12号 1976年12月)参照のこと。

(注2) V・アマグ(V. Amagou)の推計によれば、1975年におけるコート・ジボワール人の品目別食糧年間消費量は下記のとおりである。

	(単位: kg)		
	農村部	都市部	全国
白米	32	72	47.5
メイズ	38	0.01	31.5
ヤム芋	190	102	170
キャッサバ	115	59	100
プランテン・バナナ	122	68	110

(出所) Amagou, V., "La capacité de la Côte d'Ivoire à répondre aux besoins alimentaires de sa population," *Cahiers Ivoiriens de Recherche Economique et Sociale*, 第27号, 1980年12月, 19ページ。

(注3) アビジャン市人口の推移

	(単位: 1,000人)
1955年	48 ¹⁾
1965年	340 ²⁾
1975年	921 ²⁾

(出所) 1) Ministère du Plan, *Etude Socio-Economique de la Zone Urbaine d'Abidjan, Rapport*, 第17号。

2) Ministère de l'Economie, des Finances et du Plan, *La Côte d'Ivoire en chiffres 1978-79*.

(注4) たとえば1970年をはじめから、コート・ジボワール政府は流通機構の整備・近代化政策の一環として、市内の各市場の周辺に散在している食糧卸売問屋を統合し、市郊外に中央卸売市場の建設を計画し準備をすすめてきたが、財政事情の悪化も手伝って中断したまま今日にいたっている。

地場産の食糧は、米を除いてすべてこのルートにのって販売されてきた。1960年代から政府の食糧自給化

政策の一環としてはじめられた米作奨励政策にもとづいて、米作開発公社(SODERIZ)が生産者からは国際価格よりも高い奨励価格で買付け、消費者には国際価格なみの低い公定価格で販売してきたため、米の流通は同公社の独占下にあった。しかし、採算性を無視した同公社の経営が大きな赤字の累積を生み、1977年、同公社は解体を余儀なくされた。その後、米の流通機構がどのように変化したのか、それを伝える情報はない。

(注5) Lewis, Barbara, "The Dioula in the Ivory Coast," Carleton T. Hodge 編, *Papers on the Manding* 所収, ハーグ, Indiana University Publications, 1971年, 273~307ページ。

(注6) Meillassoux, Claude 編, *The Development of Indigenous Trade and Markets in West Africa*, ロンドン, Oxford University Press, 1971年, 47~48ページ。

(注7) Hopkins, A. G., *An Economic History of West Africa*, ロンドン, Longman, 1973年。

(注8) メイヤスーより正統的なマルクス主義者であることを自認している J・シュール・カナル (Jean Suret-Canale) は、メイヤスーの方法をマルクス主義と認めていない。両者の論争については、原口武彦「アフリカの『伝統的社会』について」(『アジア経済』第12巻第3号 1971年3月) 86~98ページを参照のこと。

(注9) Hopkins, 前掲書, 124ページ。

(注10) 植民地化前の西アフリカの「経済」に注目するもう一つの研究潮流として、K・ポランニー(K. Polanyi)を始祖とし、G・ダルトン(G. Dalton)らに継承される経済人類学の潮流がある。彼らは、植民地化前の西アフリカの「経済」を素材として、ヨーロッパ近代に成立した「経済」観そのものを批判しようとしている。その点で、ヨーロッパ的な「経済」観をそのまま植民地化前の西アフリカにも適用しようとするホプキンスらに対して強い批判意識を有している。たとえば、ダルトンがホプキンスの『西アフリカ経済史』を批判した書評が *African Economic History*, 第1号 (1976年春季), 51~101ページに掲載されている。

II ジュラ商人の起源と系譜

前節では、ジュラ商人ということばを説明めきで用いてきたが、ジュラ商人とはそもそもどのような商人を指

すのであろうか。実はこの問題は簡単に答えられない要素を含んでいる。

ジュラ (dula, dyula, dioula)^(注1)あるいはジュラ商人(仏語では dioula commerçant)という語は、今日においても現地における日常用語として、またそれを反映して学術論文においても論者によってさまざまな意味内容で用いられているのが実状である。そこにはジュラ商人という範疇(今日なお不確定な状態ながら)が形成されてきた西アフリカの歴史的な事情が反映しているのである。

ジュラという語は、もともとマンディング語系の諸語にあっては、長距離交易に従事する巡回商人という特定の職業を意味する語であり、今日でもそのような意味で用いられているのである^(注2)。しかし、もともと巡回商人という職業を意味したジュラという語は、のちにのべるようにある時代から特定の地域において、特定の族的集団の意味合いを帯びた語に転化し、その族的集団の母語は、ジュラ語とよばれる一つの言語として自立するにいたったのである。この歴史的過程をまず言語学的に、つぎには人的な系譜の問題として、資料が許すかぎりできるだけ具体的に辿ってみよう。

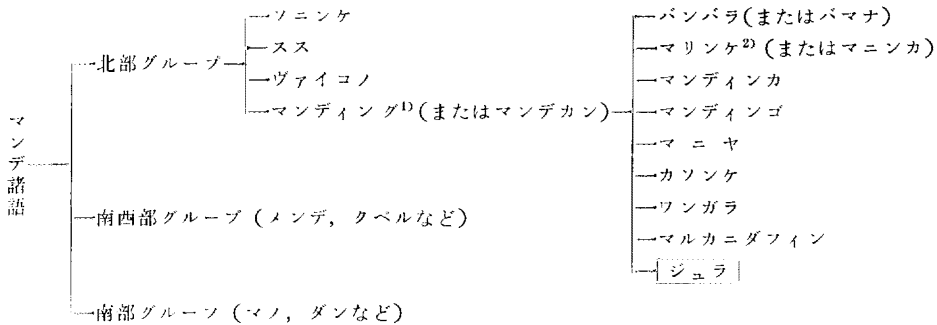
1. ジュラ語

今日、ジュラ語とよばれている言語は、言語学的にどのように位置づけられる言語なのだろうか。

それについても言語学者の間に諸説があり必ずしも確定しているとはいえないようである。C・S・バード(C. S. Bird)^(注3)によれば、ジュラ語は、バンバラ(またはパナマ)語、マリンケ(またはマニンカ)語などとともにマンディング(またはマンデカン)系諸語に分類される言語である^(注4)。そしてこのマンディング諸語は、ソニンケ(またはサラコレ)語、スス語などとともに北部マンデ語群を構成している。さらに北部マンデ語群は、南西、南部マンデ語群とともにマンデ諸語という大分類の中に包括されている(第1図)。

バードによれば、ジュラ語を含むマンディング諸語は、西アフリカ諸言語の中であって次のような例外的な特徴をもっている。まず第1に、マンディング諸語を母語とする人口の規模の大きさである。ニジェール川上流地域を中心に東はオート・ボルタ西部まで、西はセネガル中部からモーリタニア国境にいたる地域まで、北はマリのモプチからセネガル川にいたるラインから、南はギニア中部からコート・ジボワール北西部にいたるまでの広大な地域に、マンディング諸語を母語とする約400万

第1図 マンデ諸語の分類



(出所) Bird, C. S., "The Development of Mandekan (Manding): A Study of the Role of Extralinguistic Factors in Linguistic Change, David Dalby編, *Language and History in Africa* 所収, ロンドン, Frank Cass, 1970年, 146~159ページの記述にもとづいて作成。

- (注) 1) バードは、マンディングよりマンデカン(マンデの言語の意)という呼称を選好しているが、本稿ではより慣用的であるとおもわれるマンディングを採用しておく。
 2) バードは、マニンカという呼称を採用しているが、これもマリンケの方が慣用的であるとおもわれるので本稿ではマリンケを採用する。ただしマリンケとマニンカとを区別して用いる用語法もある。本文(注4)を参照のこと。

ちなみにグリーンバーグ(J. H. Greenberg)のマンデ語の分類は、東部グループと西部グループに二分され、バードの北部グループの南西部が、グリーンバーグの西部グループにはほぼ対応している。Greenberg, Joseph H., *Languages of Africa*, ハーグ, Mouton, 1963年, 8ページ。

人の住民が居住している。そしてさらにこのマンディング諸語地域(その面積はほぼフランスに、そして日本の1倍半に相当する)の周辺のセネガル、ガンビア、シェラ・レオン、リベリア、コート・ジボワール、オート・ボルタ、ガーナ北部の諸地域にマンディング諸語は浸透しており、これらの周辺地域においてマンディング諸語を母語としてあるいは第2言語として用いている人びとの数を加えれば、マンディング諸語人口は800万に達するものとバードは推計している(注5)。またマンディング諸語は、その言語人口が800万に達する広大な地域に流通する言語であることに加えて、マンディング諸語に分類される各言語間にはきわめて高い凝集性があり、いずれの言語も相互に理解することがかなりの程度可能であるということが第3の特徴をなしているという(注6)。

以上のように特徴づけられるマンディング諸語の中にあつて、本稿の主題にかかわるジュラ語(注7)はさらに次のような特徴をもっている。

今日、コート・ジボワールの首都アビジャン市を中心に商業言語として広く普及しつつあるジュラ語は(注8)、その生成の過程からして商業言語であった。のちにのべるように12世紀頃からマンディング諸語を母語とする人

びとの中核的な居住地であるニジェール川上流地域から、マンディング系の商人が他の族的集団が支配している地域に飛び地的に移住し、広大な交易ネット・ワークを形成して長距離交易を発展させていった。これらのうちとくにコート・ジボワール東北部に移住した商人たちによって用いられていた言語が、既存のマンディング諸語から分化、自立してジュラ語とよばれるものになったのである。

今日、コート・ジボワールでもっとも広く普及しているとおもわれるアビジャン・ジュラ語についていえば、その分化、自立化はさらに最近の植民地化以降のことであろうとおもわれる。その証拠にアビジャン・ジュラ語の場合には、フランス語からの借用語彙がある調査によれば5%に達している(注9)。したがってその成立がより古いコング・ジュラ語を母語とする人びとは、アビジャン・ジュラ語を侮蔑的なニュアンスをこめて、タブシ・カン(tabusi-kan)(注10)と呼んでいる。

今日の西アフリカの言語状況のもとで、ジュラ語およびそれを含むマンディング諸語はおよそ上記のように位置づけ特徴づけられる言語なのである。さて、では本稿

の考察の対象とするジュラ商人は、このジュラ語を母語とするという意味でのジュラ人の商人と定義することができるであろうか。

これは定義としては明解であるが、本稿の考察の対象としているジュラ商人は、この定義の枠をこえたものとならざるをえない。というのは、まず第1に、今日活動しているジュラ商人の系譜を辿ってみようとするとき、ジュラ語がジュラ語として他のマンディング諸語から自立するにいたる歴史的経過そのものが重要な意味をもってくるからである。つまり、ジュラ語はおそらく直接的にはマリンケ語から分化、自立してきたものとおもわれるが、それ以前の時期においてマリンケ語をはじめとするマンディング諸語を母語とし商業言語として用いて長距離交易に従事していた商人たちは、あきらかに系譜的に今日のジュラ商人につながっているのである。

第2には、今日的状況に関連して次のような問題がある。すでに述べたようにジュラという語が、族的範疇としての意味あいを帯びてくるのはごく最近のことであり、今日なおジュラは、族的範疇としては不確定な状態にある。今日の状況において、系譜的にはジュラあるいはひろくマンディング系に属していない人びとが、イスラム化しジュラ語を用いて商業活動に参加するというジュラ化現象がおこっているのである(注11)。逆にそのような不確定にしるジュラ語が成立し、ジュラが族的範疇として意味合いを帯びてくることによって、商業には従事していない農耕民のジュラ人という範疇も現実にあらわれてきているのである。

以上のような歴史的・今日的状況を考慮して、本稿の対象とするジュラ商人を今日の文脈の中で定義するならば、それぞれの系譜のいかんを問わず、今日、アビジャン市を中心にジュラ語を商業言語として用いて商業活動に従事している専門的商人である。系譜のいかんを問わずというニュアンスを表現したいために、これは日本語に限っての問題にすぎないが、本稿ではジュラ人商人とせずあえてジュラ商人としたのである。この定義は、今日、アビジャン市で日常的用語として用いられている「ジュラ」という語の意味にはほぼ合致している(注12)。

そして今日のジュラ商人の歴史を考察する際には、上記の「ジュラ語を用いて」というところを「ジュラ語を含むマンディング語を用いて」と限定をゆるめた意味で、本稿ではジュラ系商人ということばを用いることにする。ジュラ商人(欧文文献では、単に dioula,あるいは dioula commerçant など)という語にこのような広義の

定義を明示的に示している欧文文献は筆者の知るかぎり存在しないが、たとえば以下に紹介するB・M・ペリンバム(B. M. Perimbam)の定義(注13)と実質的内容においてそれほど差異はない。

2. ジュラ商人の起源と系譜

前項では、言語の側面からある程度、ジュラ商人の特徴づけを試みたが、ここでは主にペリンバム(注14)の研究に依拠していわば属人的にジュラ商人の系譜を辿ってみることにする。

今日、活動しているジュラ商人の中核的グループの系譜を彼らが保持している口頭伝承などによって辿ってみると、その起源は古く古ガーナ帝国時代にさかのぼることができる。

ガーナ帝国(注15)は、サハラ砂漠の南縁に紀元数世紀(注16)にソニンケ(またはサラコレと呼ばれる)人によって形成され、1240年、南部のマリ帝国の王スンジャタ(Sunjata)によって征服された(注17)。この間、ガーナ帝国は金を中心とするサハラ縦断交易のルートを支配すること(注18)によって繁栄を享受していた。ソニンケ人はマンディング語族と同様にマンデと総称される族的集団の北部グループに属していることは、前項の言語分類で示したとおりである(第1図参照)。

マンデ人が前項の言語分類で示したように、ソニンケ、マンディングなど北部グループと南西部グループ、南部グループに分化して行く以前の原マンデ人は、ニジェール川の北方、今日のサハラ砂漠の中心部に本拠地をおき、紀元前約5000年頃から、当時まだ緑豊かな草原であったこの地域で新石器時代の生活を営んでいたものと推測されている(注19)。この原マンデ人は、サハラ砂漠の乾燥化に伴って次第に南下し西アフリカ各地に分散し広大なマンデ語文化圏を形成するにいたる。

ここでの記述に関連するソニンケとマンディングとの分化の時期について言語の問題としていえば、それはマンディング諸語間の分化(14世紀以降のことであろうと推定されている)よりかなり早く、紀元前500年頃からすでに分化しはじめたものと推定されている(注20)。

さてこのガーナ帝国時代、少なくともその後期になると、ソニンケ人の間にサハラ縦断交易に従事する専門的な商人グループが形成されていたらしい。彼らはバンブク(Bambouk)などセネガル川上流の金鉱から金を搬出し、サハラ南縁でサハラを越えてきたアラブ人商人と取引を行っていたものとおもわれる。

12世紀、ガーナ帝国が崩壊しはじめるにつれてソニン

ケ人は、サヘル地帯のワラタ (Walata), チシト (Tichit) などのオアシスから南下, 分散しはじめる。ジュラ商人の系譜に接続するのは、この南下, 移動してきたソニケ人であるといわれている。

今日のジュラ商人の多くは、自分たちの祖先は、この時代、ニジュール川岸のジャ (Dja, 第2図参照) に定着したノノ (Nono) とよばれるソニケ人の商人クランであると主張している。現に今日のジュラ商人にはソニケ系の氏姓をもつものが多いという(註21)。

ジャに定着したソニケ人商人(おそらく他の要素も吸収し拡大していったものとおもわれるが)はマリ帝国体制下で長距離交易に従事した。13世紀までには、その後の長距離交易の中心として繁栄したニジュール川岸の商業都市ジェンネも彼らの手によって建設された。これらの商人は、系譜的にはソニケ起源とみられるものの、この時代になると母語のソニケ語ではなく、マンディング語(註22)を使用して交易活動に従事するようになっていた。系譜的にはソニケ系の彼らが、なぜ母語のソニケ語を捨てマンディング語を用いるようになったのかという点は、不明であるとペリンバムはのべている(註23)。しかし、むしろマリ帝国体制下でマンディング語を使用して交易活動に従事する商人たちが、なぜソニケ起源を主張するのかという問題設定の方が、もし後者の事実(彼らがマンディング語を使用していたということ)の確証性が高ければ有効であるようにおもわれる。つまりガーナ帝国につながるソニケ人起源を主張することが、当時の状況の中で自らの存在の正統性の証明となる文脈が存在していたということは十分に考えられるからである。

いずれにしろ、マリ帝国体制下、おそくとも14世紀中頃までには、マンディング語を用い長距離交易に従事する専門的商人グループが出現していた。1352年、マリ帝国を訪れたアラブ人旅行家イブン・バトウタは上記のような商人グループの存在を、その見聞録の中に書きのこしている(註24)。そしてペリンバムは、この商人グループを「原ジュラ」(proto-dyula)とよび、ジュラ商人の始祖とみなしている。

このマリ帝国体制下で抬頭した「原ジュラ」は、その後、西アフリカ各地に移住, 分散していった。そしてガーナ帝国時代からすでにアラブ商人との接触を通じてイスラム化していた彼らは、商業とともに西アフリカにおけるイスラム文化の伝播者の役割を果たしていった。

では、ジャに定着したソニケ人商人クラン、ノノを

始祖とする「原ジュラ」は、その後どのような過程を経て、長距離交易に従事する専門的商人として西アフリカ各地域に移動, 定着し自らの活動領域を拡大していったのであろうか。

まず西方からいえば、彼らの一部は現在のセネガルとマリとの国境地帯にあるバンブク金鉱の近くバフイング川岸に移動, 定着しジャハ (Diakha) という町を建設した(15世紀末以前)。彼らはまたセネガル川上流の川岸にガディアダ (Gadiada) という商業, 宗教都市を建設した(註25)。そしてこれらの拠点からさらにガンビア川沿いに河口に向かって進出し、ガンビア川河口からニジュール川上流にいたる1000キロメートルにおよぶ東西交易ルートが形成されることになる。

南部に向っての進出についていえば、それは14世紀末から15世紀にかけてはじまったマンディング諸族全体の南部への移動にとまなうものであった。ニジュール川上流地域全体(現在のコート・ジボワール北西部, マリ南部, ギニア東部)がマンディング語地域化していった。

東南に向っての進出についていえば、彼らは今日のガーナ・アカン語族地域の金鉱に向ってのルート沿いに移動, 定着しボボ・ジュラソ, コング, プナ, ボンドック, ベゴ(またはビゴ)などの商業都市を建設した。

東方への進出についていえば、モシ諸王国およびその南のダコンバ王国の中に少数者の商人グループとして定着するとともに、ソングイ帝国時代(14世紀末~16世紀末)に現在のナイジェリアの北部, ハウサ地域のカチナ, カノにまで進出していった。また、カノからアカン地域の金鉱にいたるルート上のニキ (Nikki, 現在のベニンの北部) などにも彼らは拠点を建設した。

これらの移動, 定着は、おおまかに三つの型に分類することができる。第1は南方への進出がそれで、ジュラ系商人が彼らだけでなくマンディング人全体の移動にもなってそのグループ内の専門的商人として移動していった場合である。

その第2は、他族の居住地域にジュラ系商人だけが、あるいは彼らが主導するグループが、商業目的のために移動し、その地域に少数者として定着した場合である。その場合、文化的にその地域に同化してしまった場合(モシ諸王国の場合)と、あくまでイスラム, マンディング語といった彼ら固有の文化を堅持し、マンディング人のいわば飛び地的居住地域を形成した場合とがある。

そしてこの最後の形態の移動が、もともとマンディング諸語において商人を意味する普通名詞にすぎなかった

ジュラという語を族的範疇に転化させた歴史的契機であったのである。すなわち「非マンディング社会の中に飛び地を形成して居住することによって、ジュラはマンディング人を、彼らの祖先が定着した地域の族的集団から区別するための用語となった」(注26)のである。

(注1) フランス語では *dioula* とつづるのが一般的である。 *jula* は原音にもっとも忠実に発音記号化したつづりである。

(注2) 資料的に確認しえたかぎりでは、今日のバンバラ語では商人を意味する普通名詞である。ただし、アビジャン市で用いられているアビジャン・ジュラ語の語彙集には固有名詞としての用語しか見当らない。

バンバラ語の語彙については、Meillassoux, Cl, *Urbanization of an African Community: Voluntary Associations in Bamako*, シアトル, University of Washington Press, 1968年, 151ページ。

アビジャン・ジュラ語については、Dumestre, G., *Lexique fondamental du Dioula de Côte d'Ivoire*, I. L. A., Université d'Abidjan, 1974年。

(注3) Bird, C. S., "The Development of Mandekan (Manding): A Study of the Role of Extralinguistic Factors in Linguistic Change," David Dalby 編, *Language and History in Africa* 所収, ロンドン, Frank Cass, 1970年, 146~159ページ。

(注4) D・ダルビー (D. Dalby) によれば、マリinkeはマンディンカまたはマニンカおよびその系列の諸語を包摂するフランス語の呼称である。Dalby, David, "Distribution and Nomenclature of the Manding People and Their Language," C. T. Hodge 編, *Papers on the Manding* 所収, ハーグ, Indiana University Publications, 1971年, 3ページ。

(注5) Bird, 前掲論文, 146ページ。

(注6) 同上論文 148ページ。

(注7) ジュラ語と一口にいっても、その地域によって異なった方言があり、また他のマンディング諸語との関連でそれらの諸方言のどの範囲をジュラ語と総称するかという点がかならずも確定していないようである。

コート・ジボワール国内諸地域のジュラ語を比較研究しているM・J・ドリヴ (M. J. Derive)は、ジュラ語を、その地域によってコング方言、オジェネ方言、ボンドゥク方言、セゲラ方言、トゥバ方言、そして主にアビジャン市でジュラ語を母語としない人びと

の間で使われている商業ジュラ語 (*commercial jula*, あるいは *jula véhiculaire*) に分類している。ここで方言といっても、それに対して規範化した標準語的なものが存在するわけではない。ただし話し手の意識の問題としていえば、本文でもふれるように、最後の商業ジュラ語だけは、コング方言を母語とする人々から外国人の話す非正統的なジュラ語と位置づけられているようである。しかし、機能的な面からみるともっとも普及しているのはこのもっとも低く位置づけられている商業ジュラ語であろう。

本稿では、地域によって分化したジュラ諸語を総称する場合にジュラ語という語を使用し、特定の「方言」を指すときは、たとえばコング・ジュラ語、ボンドゥク・ジュラ語、商業ジュラ語の場合もアビジャン・ジュラ語と地方名を附すことにする。ただし、ドリヴの分類によるオジェネ・ジュラ語などコート・ジボワール北西部のジュラ語については、本稿ではマリinke語とよぶことにする。この地域に居住する人びとは慣用的にはマリinke人とよばれているからである。ドリヴが慣用に反してマリinke語をジュラ語のオジェネ方言と位置づけた理由は、マリinke語が本稿でいうジュラ語にきわめて近い言語（しかも系譜的にはオジェネ方言からその他のジュラ語が派生していったものとおもわれる）であるという事実とともに、次のような事情によっている。すなわち彼女がオジェネ地方で実態調査を行なったとき、学校教育をうけフランス語でアフリカの歴史を学んだことがあるものは、自らをマリinke人とよび、ジュラ人ではないと答えた（彼らにとってジュラは商人を意味していた）が、学校教育をうけずフランス語を全く解さない人びとは、マリinkeという名を知らず、類似のマニンカ（バードはマニンカをマリinkeと同義にしかも前者を選好して用いている）については、これはギニアの住民を指すと答え、自らはジュラ人であると主張したという。調査標本も少ない簡単な調査であったために、彼女はこの事実を一般化することは留保しているが、外側からマリinke人とよばれている人びとの中に、その比率はわからないが自らをジュラ人と考えている人びとがいることは事実であろう。

しかし、本稿では上記のような状況があることに留意しつつも、従来の外部者の慣用にしがたってコート・ジボワール北西部を本拠とする族的集団をマリinkeとよび、彼らの母語をマリinke語とよぶことにする。

したがって本稿でのジュラ語とは、ドリーヴのいうオジェネ方言など(彼女のいうセゲラ方言、トゥバ方言も含む)を除いたものをいう。Derive, M. J., "Dioula véhiculaire, dioula de Kong et dioula d'Odienné," *Annales de l'Université d'Abidjan* (sér. H, Fascicule 1), 1976年, 55~83ページ。

(注8) コート・ジボワール各地の中学校の生徒(12~13歳)約2000名を対象に行なった調査(1972年)によると、ジュラ語を第2言語として理解できるものの割合は60.8%に達している。

デュメストル(Dumestre)は、コート・ジボワール国民の半数はジュラ語(あるいはその他のマンディング諸語のいずれか)を理解できるものと推計している。原口武彦「ブラック・アフリカ諸国の言語状況と言語政策——コート・ジボワールの事例——」(『アジア経済』第21巻第5号 1980年5月)66ページ; Dumestre, G.; G. L. A. Rotard, *kó dɪ?: cours de dioula*, アビジャン, Université d'Abidjan, 1974年, 1ページ。

(注9) 同上書 3ページ。

(注10) コング・ジュラ語で「タブシ」とは、長期に故郷を離れている人びと、ないしは異邦人を指す。「カン」は言語の意である。語源的には、英語の bushman からの借用語である「ブシマニ」(bùsmàni, サバンナに居住する自分たちに対比して、森林部の住民を指す)が変型したものであるという俗説があるが、言語学的にはこの説は論証できないとドリーヴはのべている。Derive, 前掲論文, 57ページ。

(注11) Lewis, B., "The Dioula in the Ivory Coast," C. T. Hodge 編, *Papers on the Manding* 所収, ハーツ, Indiana University Publications, 1971年, 275ページ。

(注12) 同上。

(注13) Perimbam, B. M., "Notes on Dyula Origins and Nomenclature," *Bulletin de l'I. F. A. N.*, 第36巻, sér. B, 第4号, 1974年, 676ページ。

(注14) 同上論文 676~690ページ。

(注15) ガーナとは、当時のアラブ人旅行者の記述にでてくる呼称であって、当事者のソニケ人の口頭伝承の中にはでてこないという。ソニケ人の口頭伝承にでてくるワガドゥ(その首都は Gumbu)の国が、このガーナに相当するものであるかどうかについては、西アフリカ史研究者の間でも確定しえていないようである。この問題をとりあげた論文としては、ソニ

ンケ人西アフリカ史研究者 Bathily, Abdoulaye, "A Discussion of the Traditions of Wagadu with Some Reference to Ancient Ghāna," *Bulletin de l'I. F. A. N.*, 第37巻, sér B, 第1号, 1975年, 1~49ページがある。

(注16) イヴ・バルソン(Yves Person)は、ガーナ帝国の成立は早くとも8世紀以後のことであると推定している。Person, Yves, *Samory: une révolution dyula*, 第1巻, ダカール, I. F. A. N.-Dakar, 1968年, 123ページ。

(注17) ガーナ帝国が1240年に崩壊したとする通説は、ドラフォス(M. Delafosse)がマンディング諸族の口頭伝承にもとづいて推定したものであるが、欧米の研究者の間ではアラブ人側にのこされている文献資料に照らしてこの年代推定は再検討の余地があるとされている。Vasina, J.; R. Mauny; L. V. Thomas 編, *The Historian in Tropical Africa*, ロンドン, Oxford University Press, 1964年, 40ページ。

(注18) ガーナ帝国がサハラ縦断交易を経済的基盤として成立したという通説に対してバシリー(Bathily)は疑問を投げかけサハラ縦断交易が本格化する初期にアラブ商人たちがすでに繁栄するガーナ帝国を見出し記録したアラビア語文献資料に着目し、上記の通説は少なくとも十分に論証されているとはいえないと主張している。Bathily, 前掲論文, 32~33ページ。

(注19) Stewart, M. H., "The Role of the Manding in the Hinterland Trade of the Western Sudan: A Linguistic and Cultural Analysis," *Bulletin de l'I. F. A. N.*, 第41巻, sér. B, 第2号, 1979年, 282ページ。

なおステュワートのマンディングという語の使用法は、本稿が採用しているものとことなり、バードの言語分類に照らしていえばソニケ、スス、などを含めたバードのいう「北部グループ」の水準にこの呼称を適用している。

(注20) Perimbam, 前掲論文, 679ページ。

(注21) 同上論文 680ページ。

(注22) マンディング語のバンバラ語、ジュラ語などへの分化は、14世紀以降のことであるとされている。Perimbam, 前掲論文, 679ページ。

(注23) 同上論文 680ページ。

(注24) Ibn Battūta 著, C. Defremery 仏訳, *Vo-yages d'Ibn Batoutah*, 第4巻, バリ, 1922年, 391

ページ(Perimbam, 前掲論文, 679ページより孫びき)。

ただし、上記書の日本語抄訳では、上記の記述は省略されている。前嶋信次訳『三大陸周遊記』(世界探険全集2)河出書房新社 1977年。

(注25) Perimbam, 前掲論文, 682ページ。

(注26) 同上論文 678ページ。

III 植民地化前(14~19世紀)のジュラ系商人

前節でのべたように、14世紀までにサヘル地域から南下してニジェール川岸のジャに定着したソニケ人の一クラン、ノノを始祖とするといわれるジュラ系商人は、14世紀以降、西アフリカ各地に分散、移住して長距離交易のネット・ワークを拡大していった。本節では14世紀以降、奴隷貿易時代を経て19世紀末、西アフリカが全面的にヨーロッパ列強の手で植民地化されるまでの数世紀間、ジュラ系商人が展開してきた交易活動の実態を、利用可能な文献が存在する若干の事例を通じて個別的、具体的に検討する。

ここで検討するのは、1)ソングイ帝国下におけるワンガラ、2)モシ諸王国のヤルシ、3)マリ帝国下、西方に進出したジャハンケ、4)ダルボ、5)19世紀のバンバラ人のセグ王国下のマラカ、6)19世紀末、サモリ軍によって破壊されたコート・ジボワール北東部の商業都市コングやボンドゥックで活動していたジュラである。狭義にはこの最後のジュラだけが、彼らが活動していた地域においてジュラという呼称でよばれていたという意味でのジュラ商人である。しかし本稿では、前節ですでに述べたように系譜的にニジェール川彎曲部から西アフリカ各地に移動、定着し長距離交易のネット・ワークを形成し活動していたマンディング系の商人グループ全体を、各地におけるワンガラ、マルカなど固有の呼称にかかわらず広くジュラ系商人として、ここで考察の対象とする。

1. ワンガラ

14世紀以降の西アフリカの政治的変動から興味深いのは、このワンガラ商人(注1)の動向である。

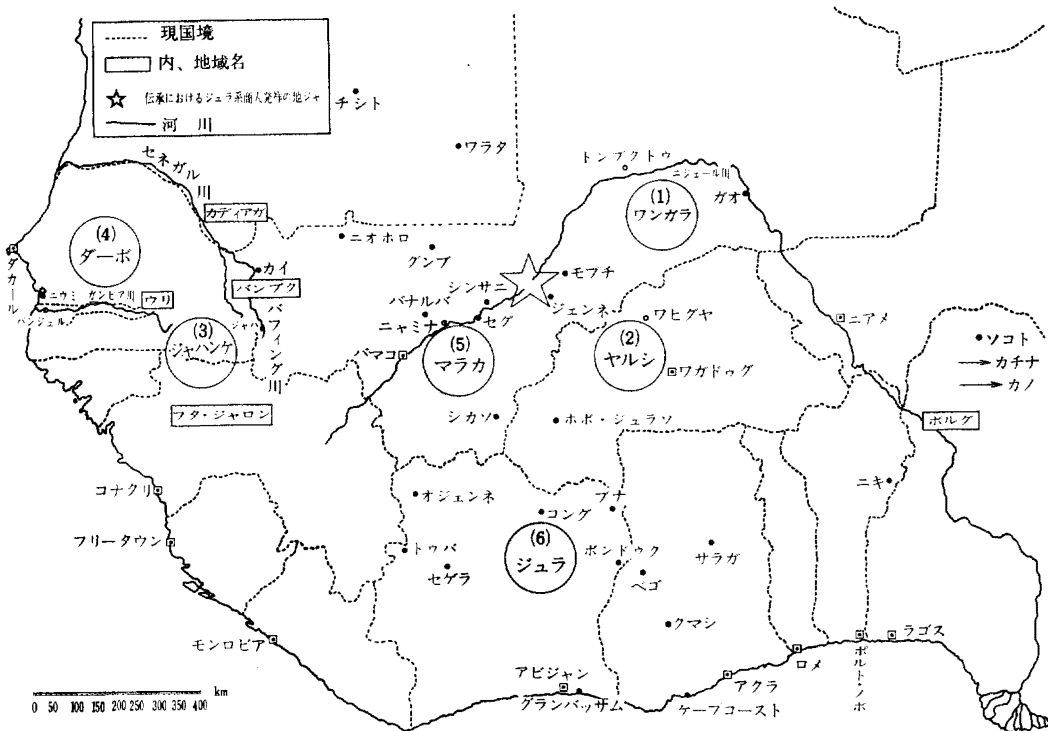
ワンガラとはもともとアラビア語文献では、ガーナ帝国、マリ帝国のもとで活動していた主として金を取扱う商人を指す呼称であった。その意味ではマンディング諸語のジュラとほぼ同じ一般的な意味で用いられていたのである。しかし、このワンガラと呼ばれるジュラ系商人はジュラという語が知られていない東方の地域まで進出する過程で、本来のジュラ商人とは異なった性格をもつ商人グループに変質していったのである。

14世紀末からマリ帝国の勢力が衰退しこれにかわってソングイ帝国が抬頭し、サハラ縦断交易の中心地であったトンブクトゥ、ジェンネ、ガオなどの諸都市は15世紀から16世紀にかけてソングイ帝国の支配下に入った。当時、これらの諸都市にはすでにジュラ系商人の一部が居住し、マリ帝国下で長距離交易に従事し各地を巡回するジュラ系商人に対して仲介と宿泊のサービスを提供していたという。トンブクトゥ市内にワンガラ=クンダ(Wangara-Counda)とばれるワンガラの居住区が存在していた(注2)。しかし、彼らはマリ帝国の衰退とともにジュラ系商人の代理人という役割を次第に喪失しマリ帝国を本拠とするジュラ系商人から自立し、ソングイ帝国の政治にもイスラム教徒として積極的に介入するようになった。1493年にアスキア・ムハマド(Askia Muhammad)がひきおこしたクーデタの成功のかけには、彼らの強力な支持があったといわれている(注3)。そして彼らはソングイ帝国の勢力伸長、政治的安定を利用して活動領域を拡大し、他方、彼らの活動は帝国経済を支え、その交易ネット・ワークは帝国の政治的統一の維持に一定の貢献を果したとおもわれる。

要するに彼らは、マリ帝国下のジュラ系商人の系譜をひきながら、ソングイ帝国下で活動する旧マリ帝国下のジュラ系商人から自立したワンガラ商人に転化した(ことばの問題としていえば、もともとジュラと同義語であったワンガラが、独自の意味内容をもつことばに転化したといえる)。彼らはソングイ帝国支配下のガオ、トンブクトゥなどの本拠地から、中央スーダンの東部、南部にその活動範囲を伸長していった。具体的には東北に向かって現在のニジェール国のアイール(Air)地方まで、東部にはカチナ、カノなどハウサの諸都市に、また南方には現在のベニン国の北部、ニキ(Nikki)、ブサ(Bussa)などボルグ(またはパリバ)諸王国に、それぞれワンガラ商人の一部が移り住み、広大な交易ネット・ワークを15世紀末までに完成させるにいたる。

ワンガラ商人は、1591年、ソングイ帝国が崩壊しはじめたのちも、その交易活動を続けた。ソングイ帝国がモロッコ軍によって征服されたのち、多数のソングイ人が避難民としてボルグ諸王国のワンガラ居住区に流入した。そこでボルグのワンガラは、交易活動を継続するとともにソングイ語の一方言であるデンディ(Dendi)語を母語として維持するなど、ソングイ文化を継承、維持しつづけた。しかし中央スーダンにおけるワンガラ商人の勢力は次第に後退し、交易活動の主導権は、新たに抬頭

第2図 西アフリカのジュラ系商人の分布



してきたハウサ商人の手にうつることになる。ソンガイ帝国の崩壊後、ハウサ地域にもワンガラ商人が新たに流入したが、彼らは独自の文化を維持することなくハウサ文化に同化していった。そして17世紀以降になると、ハウサ語の「ワンガラワ」は、かつてのようにソンガイ帝国との結びつきに関係なく、現在のガーナ国の北部（とくにゴンジャ地域）からボルグを経て、コーラの実、金などをハウサ地域に運んでくる西方出身の商人一般を指すことばに転化したという。

以上がワンガラあるいはワンガラという語の歴史的变化の概要であるが、ソンガイ帝国時代におけるワンガラは、それ以前のアラビア語文献で使われているようにジュラとは同義語ではなく、ソンガイ帝国時代に政治的権力と結びついて活動していた商人グループを指していた。その意味で、系譜的にはジュラ系商人に属するとはいえ、ワンガラはジュラとは異なりソンガイ帝国時代に中央スーダンを中心に活動していた長距離交易商人であると規定することができよう。

ガーナ帝国時代のソニンケ人商人からマリ帝国のジュ

ラ系商人が形成されるにいたる過程と、マリ帝国のジュラ系商人からソンガイ帝国のワンガラ商人が形成される過程とはきわめて類似していて興味深い。しかし長距離交易に従事する商人グループがマンデ系の系譜を維持しつつ東方にその活動領域を拡大しつづけたのはワンガラ商人までである。ソンガイ帝国の崩壊後に抬頭してきたハウサ商人たちは、ワンガラを通じてその初期にはマンデ文化の影響を強く受けていたものの（たとえば、この地域の重要な交易品目の一つ、コーラの実にはハウサ語でゴロというが、これはマンディング語のウォロからきている）、系譜的にもマンディング系から自立した商人グループとして、西アフリカを今日のガーナ周辺を境界に、ジュラ系商人と活動領域を東西に二分するかたちで、その東域の長距離交易の主たる担い手となったのである。

2. モシ諸王国のヤルシ(註4)

ソンガイ帝国下のワンガラにくらべれば規模は小さいが、やはりマンデ起源を主張し他の民族的集団の居住地域に少数者として移り住み商業活動に従事してきたグルー

プとして、モシ諸王国のヤルシがある。

先住民と南方からの征服民で構成されるモシ諸王国にあってヤルシは商業、手工業技術をもって少数者ながら王朝に結びつく独自の特権的地位を得て活動してきた。

ここではM・イザール(Michel Izard)の論文(注5)に依拠してモシ諸王国の一つヤテング王国のヤルシについて検討してみよう。

今日のヤルシ人の祖先であるマンデ系の人びとが最初にこの地に渡来し定着したのは、伝承によれば15世紀末(注6)と推定されているモシ諸王朝の成立後まもない16世紀のことであるとされている。その後、18世紀まで2世紀にわたって彼らの流入、定着は徐々に行なわれた。ヤテング王国の場合についていえば、彼らがこの地に渡来したのは16世紀前半、のちにヤテング王国となるグルシ王国の成立直前のことであるという。その後流入は徐々に行なわれ、とくに18世紀末、カンゴ王朝期(Naaba Kango 1757~87年)に新たに大量の流入があり、新しい居住区が形成されたという。1958年に行なわれた人口調査によれば、かつてのヤテング王国の版図にほぼ相当するワヒグヤ郡(cercle de Ouahigouya)の総人口36万のうちヤルシ人人口は2万6000人であった(注7)。

このヤルシの祖先とされるマンデ人が、そのうちのマンディング人と特定できる人びとであったのか、さらにはジュラ系商人と特定できる人びとであったのかは不明である。しかしながら、ヤテング王国に定着した彼らおよび彼らの子孫は、すでにイスラム教徒であったことは確かである。イスラムに対して敵対的であったモシ諸王国におけるイスラムの伝播に関して北部のヤテング王国においてよりも、中、南部のモシ諸王国において大きな役割を果たしたといわれている(注8)。また彼らおよび彼らの子孫の多くは、綿花栽培、織布、染物などに従事するとともに商業にも従事し、植民地化前のヤテング王国の商業は彼らの手中に独占されていたともいわれている。以上のことから、少なくとも彼らの一部はマリ帝国下で形成されたジュラ商人の系譜をひく人びとであったものと推測される。

彼らは、モシ諸王国のみならず、モシ諸王国の北方のサモ、南方のマンブルシ、ダゴンバ、ピサの諸地域に、モシ諸王国の場合と同様に少数者として点在し、同族的連帯を強固に維持し、それらの拠点間を自由に移動し、長距離交易に従事していたという。

ヤテング王国の建設者であるヤデガ王(Naaba Yadege)は、ヤルシが自分の領内に流入、定着することを

歓迎したらしい。それは、彼らは王にとって異教徒(イスラム教徒)ではあったが、彼らの経済的な力を認めてのことであつたらしい。ヤルシは、ヤテング王国内の各地に一つの村を建設し、あるいは既存の村落の一角に孤立した居住区を形成して住みついた。しかし彼らは固有の政治組織を形成することはなかった。しかしヤルシはヤテングの歴代の王が即位式の際にまとう綿布の白衣を作製し奉納する、あるいは王にヤルシの女性を妻の1人として献納する(1806年に即位したトゥグリ王——Naaba Tuguri——以降)などの慣行にみられるように王朝に結びついた独特の政治的特権を享受していたという(注9)。

さて肝心の彼らの商業活動についてであるが、イザールは彼らが組織し行なっていた長距離交易について次のように具体的に紹介している。

ヤテング王国のヤルシが組織するキャラバン隊は、南方の中、南部モシ諸王国、ダゴンバ、ゴンジャに向うものよりも、トンプクトゥなど北方のニジュール川の彎曲部に向かうものが主であった。北方に運ぶ主要な商品は主に地元産の綿布、山羊、羊、それに奴隷、ときには、ミレット、メイズなどの穀類、豆類と、南方から運んできたコーラの実などで、これを岩塩、干し魚、ごぎなどに交換して持ち帰った。南方にむかうキャラバンは、北部から持ち帰った岩塩、地元産の綿布、原棉、さらにろば、馬などを運び、コーラの実、織布などを持ち帰った。

一つのキャラバンは、20~50人の頑健な武装した男たち(徒歩または馬を使用)とその1.5倍から2倍の頭数のろばから編成され、ルートに通じた経験豊富な商人が長にえらばれ隊全体の指揮をとった。グルンシ地方だけで18のヤルシの居住区があったが、そこから年間延べ300~400人の商人が、600頭のろば、または牛をつらねてニジュール川彎曲部にてかけていった。ろば1頭には、岩塩の場合には2本、コーラの実の場合には4000~5000個を積んだ。牛の場合には岩塩を最高5本まで積むことができた。平均的な規模のキャラバン隊は1度に20~50本の塩塊をもちかえってきた。これらの取引には特定の高価な商品(馬は奴隷、牛とだけ交換された)を除いては子安員が通貨として用いられていた。

上記の諸商品の価格を子安員(Kと略す)で表示すれば、次のとおりである。

綿布1尺(腕尺、約50cm)	50K
塩塊1本	30,000K
奴隷	70,000~75,000K

コーラ	5,000個(③3~5K)	15,000~25,000K
		(北ガーナの産地)
	(③15~25K)	45,000~125,000K
牛1頭		20,000~60,000K
ろば1頭		25,000~30,000K
馬1頭		100,000~150,000K

モシ諸王国の王および地方首長は、キャラバン隊の通過を保証する代償として彼らから贈物を受けることが慣例となっていたが、とくに彼らの通行に対して通行税を課すということにはなかつた。彼らの通過するルートで通行税を課せられたのは、北方のドゴン地域のドウエンツァ(Douentza)通過の際だけであったという。

以上に紹介したヤテンガ王国のヤルシ人商人の長距離交易に関するイザールの記述は、それがいつの時代のことであったのか特定しておらず、したがってその時代的变化についても言及されていないが、論文のタイトル、全体の記述から判断して、植民地化前夜、19世紀末の状況に関するものであるとおもわれる。

ワンガラと同様にヤルシの場合も、ジュラ商人の系譜をひき、モシの諸王国に定着したのちも、ジュラ商人と同様にまたおそらくは彼らと交易上の連携を保ちながら今日のガーナ国北部からニジェール川彎曲部にいたるルートの長距離交易に従事した。ソンガイ帝国下のワンガラと同様に、ヤルシの場合にもモシ諸王国の体制にくみこまれ、言語的にもその転化がいつどのような過程を経ておこったか不明であるが、現在ではマンデ語を放棄しモシ人の母語であるモシ語を使用するようになっていく。これらの点で、彼らはジュラ商人にとっては外延的な存在として位置づけられるであろう。

ワンガラとのちがいでいえば、ワンガラの活動がさらに東方のハウサ商人の抬頭の契機となったのに対して、モシ諸王国のヤルシの場合にはそのような波及効果を他におよぼすことはなかつたということである。これは、彼らが長距離交易に従事したトンブクトウから、モシ諸王国を経て現在のガーナ国北部にいたるルートが、西アフリカの長距離交易ルートのネット・ワークにおいては比重が小さく、いわば支線の一つにすぎなかつたということとも関連しているかもしれない(注10)。

3. ジャハンケ

これまで検討してきたワンガラとヤルシは、ジュラ商人の発祥の地とされるニジェール川彎曲部の川岸に位置するジャから東方に移動し定着したグループであったの

に対し、ここに紹介するジャハンケは、主に西方の大西洋岸に向けて移動し定着した商人グループである。

すなわちP・カーティン(Philip D. Curtin)によれば、ジャハンケは、「セネガンビアの後背地の村むらや諸都市——とくにウリ(Wuli)、タンダ(Tanda)、ニオホロ(Niokholo)、フタ・ジャロン(Futa Jallon)、ブンドゥ(Bundu)、デンティリア(Dentilia)、バンブク(Bambuk)など——に点々と定着していた商人グループ(trading people)」(注11)である。彼らの商業活動がもっとも隆盛をきわめたのは、1600年から約1850年までの約2世紀半で、この間「彼らは、ニジェール川上流から、航行可能なセネガル川、ガンビア川にいたる東西交易ルート上の(交易の)先駆者であり、もっとも重要な(商品の)輸送者であった」(注12)。つまり彼らは、今日のセネガル、ガンビアの大西洋岸を通じての奴隷貿易が隆盛をきわめた時代に、ニジェール川上流にまでいたる内陸部と沿岸をつなぐ交易ルートで活動した商人グループであった。彼らの長距離交易商人としての活動範囲は、東は今日のマリ国のセグ、シカソから西はセネガル川、ガンビア川の河口附近までの東西約1000キロメートル、南北にはセネガル川流域のガディアガ(Gadiaga)から、南の今日のギニア国のフタ・ジャロン(Futa Jallon)まで約350キロメートルに及んでいたという(注13)。

18世紀当時、つまり大西洋岸を通じての奴隷貿易が最盛期であった時代、ヨーロッパ人がジャハンケを通じて買付けていたものは、奴隷をはじめとして、象牙、バンブク金鉱の金、密ロウ、手織綿布などであり、それらと交換に彼らがジャハンケに売ったものは、インド、ヨーロッパ製の繊維、銃、火薬、鉄棒、金物、アルコール飲料、銀、銅、真鍮、しろめ製品、それにニジェール川上流地域では貨幣として流通していた子安貝などであった。またジャハンケのキャラバンは、西アフリカ内の交易活動として、セネガル川流域のガディアガやガンビア川の河口附近の住民たちの消費財として内陸産のシア・バター、鉄、綿布、フタ・ジャロン産のコーラの実などを、また東方には穀物、綿布、サルム(Salum)産の塩などを運んでいた。運搬手段としては、移送中の奴隷、ろば、人足、そしてごくまれに牛が用いられていた(注14)。

ジャハンケは彼らの主要な交易品であった奴隷をどのようにして調達したのであろうか。カーティンは、1689年、ガディアガを訪問したC・ホッジス(Cornelius Hodges)(注15)の紀行文に依拠して次のようにのべている。

ガディアガ経由で輸出されていた奴隷を、ジャハンケが買付ける市場は、サヘルのターラ (Tarra, カーティン) は、今日のマリ国の北西部のニオロ・ド・サヘル近郊のジャラ、あるいはさらにそこから 100 キロメートルあまり東方のグンプに近いナラのことであろうと推定している) にあった。奴隷商人たちは、ムーア人が北部から搬入してくる岩塩と交換するためにこの市場に東部および南部から奴隷を運び込んでいた。この市場にジャハンケはわりこんできた。彼らはヨーロッパ製品をこのターラの市場に運びこんだ。そこでは当初、繊維だけが塩と、そして塩だけが奴隷と交換可能であったので(注16)、彼らは運びこんだヨーロッパ製品のうち、非繊維製品をまず繊維と交換し、その繊維を次に塩に交換し、その塩で奴隷をえるという迂回した方法をとっていたが、ホッジスがガディアガを訪問した頃には、上記のようなまわりくどい方法にかわって、ジャハンケはまずバンブクの金鉱地帯でヨーロッパ製品を金と交換し、その金をターラに運び、それで奴隷を買付けるようになっていた(注17)。

以上がジャハンケの奴隷取引に関するカーティンの記述の概要である。カーティンは、さらにバンブク金鉱の金が直接大西洋岸に運び出されて輸出されるのではなく、ジャハンケの手を通じてサヘルのターラに運ばれ奴隷と交換され、その奴隷が大西洋岸から輸出されるようになったのは、その方が経済的利益が大きかったからであろうと解釈している(注18)。しかし、そもそもバンブクの金はガーナ帝国の時代から、サヘルを通じて北アフリカに輸出されていたはずであり、その事実との関連で、カーティンのこの解釈は説得的ではないようにおもわれる。

いずれにしろ、ジャハンケは大西洋岸を通じて行なわれた奴隷貿易の一端になっていたことは確かである。したがって彼らの活動は19世紀の奴隷貿易廃止後、衰退に向かい、植民地化にいたる新しい時代に自らを適用させることに失敗した。ジャハンケの長距離取引のネットワークは完全に崩壊し、彼らの役割は鉄道、トラック、そして植民地体制のもとでこの地域に進出してきたレパノン人商人によってとってかわられることとなった。ジャハンケ人の商業活動は、今日のジャハンケ人たちにとっては、単なる過去の思い出の一つにすぎないという(注19)。

以上、大西洋沿岸とニジェール川上流とをつなぐ東西の交易ルートを開拓しそのルートで活動していたジャハンケ商人に関する一研究を紹介してきたが、さいごにジュラとの関連でジャハンケの起源、系譜、ジャハンケと

いう語の意味についてのべておこう。

すでに検討したワンガラ、ヤルシの場合には、G・P・マードックのアフリカの部族名リストの中にその名が掲げられているが、ジャハンケの名は見当たらない(注20)。

カーティンの説明によると、ジャハンケとジュラとは共通した点が多く、事実、ジャハンケは、ジュラを「親類関係にある人びと」(a related people) とみなしているという。彼らは、ジュラと同じようにニジェール川彎曲部のジャ(またはジャハ)に定着したソニンケ人を祖先としていると主張しているという。しかし今日では、これまたジュラの場合と同じく、マリケ語にきわめて近い相互理解可能なジャハンケ語を話す(注21)。

これに対して、西アフリカのイスラム研究者、L・サンネ (Lamin Sanneh) の説明は、カーティンのそれと矛盾しないまでも、若干ニュアンスを異にしている。すなわち、サンネによれば、ジャハンケとはマンディング系およびブル系の人びとによる彼らの呼称で、「ジャハの人びと」(the people of Diakha) という意味であり、ジャハンケ人自身は、アラビア語を借用してやはり「ジャハの人びと」を意味する「アフル・ジャハ」(ahl Diakha) と自らを呼んでいる。したがって「ジャハンケ」という呼称は、単に彼らの地理的な出身地、ジャハ・マシナ (Dihha-Masina, ジャハはニジェール川彎曲部のジャの別名であり、ジャハンケの第2の定着地とされるバフイング川流域のバンブクのジャハと区別して、前者をジャハ・マシナ、後者をジャハ・バンブクと、サンネは呼んでいる——引用者注) をさし示しているだけで、族的な起源に関する主張を含むものではない。……このことを強調することは、ジャハンケは、二、三の研究者が主張してきたように、独自の言語をもつ人種的なあるいは族的集団であるかのような誤った印象を与えないようにするために重要である(注22)とサンネは、カーティンらの主張を批判している。言語的にもカーティンが「マリケ語ときわめて近い相互理解可能な」ジャハンケ語が存在しているとしているのに対して、サンネは「ジャハンケの聖職者は、コーランの教義をサラコレ (=ソニンケ) 語で行なってきている。ジャハンケの多くは今日、スス語やマンディング語を採用しているけれども、彼らはサラコレ語とは別の独自の言語を有してはいない」(注23)と述べている。そこでサンネによればジャハンケとは「サラコレ人のイスラム教聖職者のエリート集団であり、彼らの一つの専門的カーストとしての起源は、彼らがまずジャハ・マシナに住み、つづいてジャハ・バ

ンブクに移り住んだ中世アフリカにまでさかのぼることができる。」(注24)と説明される。

サンネの上記の定義からもわかるように、サンネのカーティン批判の論点は、ジャハンケを一つの族的集団とみなすかどうかというよりも(この問題は、族的集団をどのように定義するかによって)、ジャハンケが植民地化前の数世紀において、まず商人グループと特色づけられる存在であったのか、あるいは、イスラムを布教する聖職者の集団であったのかという点にあるようである。サンネは、ジャハンケをまず商人グループとして特徴づけたカーティン説を批判してジャハンケは、まず西アフリカにおけるイスラムの布教に貢献した聖職者集団であったことを強調している。

サンネによれば、今日、セネガンビアを中心に各地に点在しているジャハンケ社会の人びとは、彼らの聖職者活動の始祖としてアル・ハジ・サリム・スワレ(al-Haji Salim Suwaré, 別名ムベンバ・ライエ・スワレ M'bemba Laye Suwaré)の名をあげる。ジャハンケの伝承に登場するこの高名なソニンケ人聖職者について、今日なお不詳な点も多いが歴史上、実現した人物であることは明白であるとサンネはいう。伝承によればアル・ハジ・サリムは、ソニンケ人の王国ワガドゥ(アラビア語文献に記されている古ガーナ帝国のことであろうとする説が有力である。サンネも同一視している)(注25)の建国者とされているマガム・ジャベ・シセ(Magham Diabé Sisé)の異母兄弟とされている。ワガドゥ王国の始祖とされるマガム・ジャベ・シセとアル・ハジ・サリムが同時代人であることが強調されているという事実は、ソニンケ人の歴史においてマガム・ジャベが世俗的・政治的権力の象徴とされているのに対し、アル・ハジ・サリムはそれから自立した宗教的権威の象徴とされていることを意味しているというのが、サンネの解釈である(注26)。

アル・ハジ・サリムは7回にわたってメッカに巡礼を行なったのち、ニジェール川彎曲部のジャハ・マシナに定着し布教活動を開始する。サンネが行なった現地調査(1972~73年)の結果、ギニアのトゥバに居住していたアル・ハジ・バンファ・ジャビ(al-Hāgi Banfa Jabi)のもとで入手したアラビア語資料(注27)によれば、アル・ハジ・サリムはジャハ・マシナ地域に政治的動乱がおこった際、戦乱と政治的抗争からのがれるために東方への逃避を決意する。サリムに率いられた集団はまずジャフスにつづいて、ジャハ・バンブク(第2図参照)に移り住む。この時サリムと行動をとともにした使徒の人数は、一

説には3600人をこえていたという(注28)。

地元存在する伝承はいずれもアル・ハジ・サリムをその後、セネガンビア地域の聖都となるジャハ・バンブクの建設者としている。アル・ハジ・サリムを15世紀後半の人物(これは、ブラック・アフリカにおけるイスラム化の歴史の時代区分において重要なことであるという)と推定している歴史研究者たち(カーティンも、ウルクスが主張するこの説を受けいている)は、彼を15世紀前にすでに存在していたといわれるジャハ・バンブクの建設者とするこの説を認めていない(注29)。サンネは、さまざまな資料を総合的に判断した上で、アル・ハジ・サリムが活動した時代と、ジャハ・バンブクが建設された時期は、ともに12世紀中葉から13世紀であったと推定している。もっともジャハ・バンブクが、ジャハ・マシナからジャフスを経由して移動してきたアル・ハジ・サリムのグループによってはじめて建設されたものであるという説を支持することは留保し、アル・ハジ・サリムはジャハ・バンブクの建設者であるか、そうでないにしてもすでに存在していたこの町を聖都化することに大きく貢献したものと推測している(注30)。この都市は、その後のジャハンケの聖職者としての活動の拠点となった。

アル・ハジ・サリムを指導者とするジャハンケは、ジャハ・バンブクにおいて奴隷労働に依拠した農耕を経済的基盤として自らは専らイスラムの研究、教育、布教活動に従事していた。そしてアル・ハジ・サリムは、自分の子息の1人、フォファナ=ギラシ(Fofana-Girasi)の一族(qabila)にジャハ・バンブクの商業権を与え商業活動に従事させたという伝承もあるが、ジャハンケ全体としては聖職者の活動が中心であったとサンネは主張している(注31)。

サンネが収集したアラビア語資料によれば、ジャハ・バンブクは、少なくともその初期においてはアル・ハジ・サリムとともにジャハ・マシナから移動してきた移住民を中核とし、整然とした組織をもつ聖職者の自治都市であった。市はアル・ハジ・スワレを長とし、四つの教区から編成されていた。その第1はスワレクンダ(Suwarékunda)で、聖都の諸施設全体を統轄していた。第2のダマレクンダ(Damarékunda)は、アル・ハジ・サリムの後継者集団として認められていた。第3のフォファナ=ギラシクンダは、すでにのべたようにこの都市の商業関係と資産を統轄していた。第4のファディクンダ(Fādiqakunda)は、イスラム学校の学生問題(教育方法、

組織、募集、農業労働など)を司どっていた。アル・ハジ・サリムはこのような組織の頂点に立って聖都を統轄するとともに、セネガンビア地域を中心に各地に点在するイスラム教徒居住地を歴訪した。

このジャハ・パンブクは、マリ帝国時代、同帝国の版図内に入ったが聖都として政治的自治を享受しつづけた。年代は未だ確定されていないがおよそ15世紀頃、政治的動乱(その詳細は不詳)が起り、パンブク地域一帯からイスラム勢力は一掃され、聖都ジャハ・パンブクも崩壊する。そしてジャハ・パンブクから避難したジャハンケは、さらに東方のブンドゥ(Bundu)、ニオホロ、デンティリアなどに新たな拠点を築いていく。

他方1431年、ジャハンケのカバ・リネッジに属するアブド・アル・ラフマン(Abd-al-Rahmān)がメッカ巡礼の途中、ハウサランドのカノでカノの首長ムアマッド・リムハ(1463~99年在位)にこわれて巡礼を断念、カノに定着したということが、17世紀に書かれたアラビア語の年代記『アスル・アル=ワングライーン』(Asl al-Wangarayin ワンガラ人の起源)に記録されている。この聖者アブド・アル・ラフマンに同行しカノに定着した使徒の人数は3636人、また他の伝承によれば160家族(qabīlahs)といわれている(注32)。

要するにサンネは、その起源においてジャハンケはソニンケ人の間に形成された聖職者集団であり、セネガンビアから東方のハウサランドにまで各地に分散、移動しそこに彼らの拠点を建設していった過程は、一義的には彼らの聖職者としての活動としてとらえられるべきであると主張しているわけである。西アフリカにおけるイスラムの伝播は戦士(ジハード=聖戦)と商人の手を通じて行われてきたという通説に対して、サンネはイスラム研究者として聖職者の果たした役割を強調する。その観点からすると聖職者集団としてのジャハンケの歴史的役割はきわめて重要な意義をもって来る。サンネはアル・ハジ・サリムの果たした役割について次のようにのべている。「明らかなことはイスラムを平和的に伝播し西アフリカの各地にイスラムのイメージを確立し支えることをめざす諸制度、諸構造を確立したことは、スーダンのイスラムに対する彼のもっとも独創的な深大な影響力をもった貢献であった」(注33)。

サンネが主張するように、ジャハンケはその発生、系譜においてまず聖職者集団であったというべきかもしれない。しかし、彼らが副次的にしる奴隷貿易時代は、ニジェール川上流から、大西洋岸にいたる交易ルートを確

立し、そこで奴隷を主要な商品とする長距離交易に従事していたことも事実であろう。また、ジャハンケの聖職者としての活動を支える経済的基盤は、彼らとその宗教活動の代償として与えられた奴隷を主要な労働力とする農耕にあったということは、サンネが指摘しているとおりである(注34)。要するにジャハンケの聖職者としての活動も、商人としての活動も、いずれも奴隷貿易時代の奴隷に依拠していたということである。

4. ダーボ・ジュラ

ダーボ・ジュラは前項のジャハンケと同じく、奴隷貿易時代を通じて東西交易ルートのガンビア川流域において活動していた商人クランである。ここでは、D・R・ライト(Donald R. Wright)が1974年から75年にかけてガンビア川流域で行なった聴き取り調査の成果(注35)に依拠してダーボ・ジュラについて検討する。

ライトによれば、ダーボはガンビア川沿いにガンビア川下流から東方の広大な内陸部の間で、奴隷、布地、鉄、塩、ヨーロッパ製工業製品、その他の輸送、交易に従事していた「いくつかのマンディンカのジュラ(Jula)のクランの一つ」(注36)である。ここでライトはジュラを商人を意味する普通名詞として用いている。そしてダーボは族的にはマリンケ(注37)に属するとされている。

セネガンビア地域に現存する伝承によれば、ガンビア川流域で長距離交易に専ら従事していたマリンケ系の商人クランとしては、ダーボのほかシンガテ(Singateh)、キンテ(Kinteh)、バヨ(Bayo)、ダンソ(Danso)、フォファナ(Fofanna)(注38)、ニヤリニヤ(Nyarinya)など数個のクランがあった(注39)。

ライトは、彼らが商人クランとして自らを確立したのは、マリ帝国の興隆期(13世紀)であり、このマリ帝国下で、長距離交易に進出しはじめた一部のマリンケ人自由民(それまで彼らの多くは獵師あるいは武士であった)が彼らの始祖であろうと推測している。

ライトが収集したダーボの伝承によれば、ダーボの祖先は、ニジェール川上流のマリンケ人の故郷の地のある村から西に向いガンビア川流域に移動してきた。それは12世代前のことであったという。その祖先は移動の際、短剣とコーランと金の腕環を携行した。これらはあきらかにダーボの祖先一族の中に含まれていた、戦士、聖職者、商人という要素を象徴するものであるとライトは解釈している(注40)。

ダーボの始祖は、まずカザマンズ川中流のテンディンディ(Tendindi)に定着し、そこから彼の息子たちは自

分自身の村を建設するために四散していった。戦士の一族はカザマンス川の南方、カブ(Kabu)地方に移動し定着した。聖職者の一族は北方に移動しガンビア川流域に向い、さらに小さな集団に分れてガンビア川沿いにニアニ国(Niani)のドボ(Dobo)、キヤング国(Kiang)のドゥンプントゥ(Dunbuntu)、ジャーラ国(Jarra)のダサラミ(Dasalami)などに点々と定着した。さいごに商人の一族は、ガンビア川の河口から航行可能な最も上流の地点にあったウリ(Wuli)国から河口にむかって川沿いの数カ所に定着し、主に奴隷と綿布との交易に従事しはじめたという。

ライトの面接した情報提供者の一人、アル・ハジ・ラミン・ダーボ(Al Haji Lamin, ダーボの末裔の一人、彼自身も現在、商業を営んでいる)は、ガンビア川河口の北岸に存在したニウミ(Niumi)国に内陸から奴隷をはじめて運びいれた最初のダーボ商人の一人であるフォマング・ダーボ(Fomang Darbo)が、故郷のウリ国からニウミ国に到着したとき、国王(マンサ, mansa)に請われて同国の商業中心地であったジュフル(Juffure)に定着した経緯について語っている(注41)。フォマング・ダーボはジュフルに定着したのちは、ニウミ国の徴税人として活動するとともに王の代理人として交易に従事したという。

交易とイスラムの関係については、ダーボの場合にも前項のジャハンケについてサンネが指摘しているように、布教(モリヤ, moriya)と巡回商業(ジュラヤ, julaya)とは峻別され、ダーボは全員、イスラム教徒であったが商業に従事するものが聖職者を兼ねるということとはなかったという。それは一つには、イスラムの浸透がまだわずかである社会とはちがってイスラムと絶えず接触していたガンビア川流域のマリンケ人社会のような地域では、聖職者が行なう祈禱などもかなり凝ったものになっており専門的な訓練を要し、商人が片手間に行なえるようなものではなくなっていたためでもあるとライトは説明している(注42)。そういうこともあってガンビア川流域に定着したダーボ・クランでは商業に従事するもの(ジュラ)と聖職者(マラブ)とは截然と分業化していたという。これは、ジャハンケについてサンネが主張している西アフリカでのイスラムの伝播における聖職者の役割の重要性ということを補強する事実であるといえよう。

それはともかく、ダーボ商人はウリ、ニアニ、サルム(Saloum)、ニウミなどガンビア川流域の諸小国の間を巡

回して経済的成功を収めたのである。ダーボ商人は、それらの諸国の王に対して、彼らが必要とする物資(戦時における馬、食糧不足等の穀類)を供給することの代償として、自分たちの東西長距離交易ルートの安全を保証させた。ダーボ商人は、政治的には諸勢力間において中立を保ち、政治的調停者の役割を演じることもあった(注43)。

ダーボ商人は、自らの家内奴隷および交易用の奴隷の労働力を利用してミレットや棉花の栽培も行なっていた。自家消費とカバンコ(Kabanko)とよばれる貢納を除いた余剰のミレットは、ガンビア川河口の町に住むアフリカ人、ヨーロッパ人に売り渡した。棉花については、これも奴隷労働を利用してまず約50センチ幅の綿布を織り、それをつなぎあわせてファロ(falo)とよばれる布地を作製した。この布地は、マリンケ社会にあってはとりわけ婚資として用いられる威信財であった。布地の余剰は、馬、ろば、牛などと交換された。このようにしてダーボ商人たちは富を蓄え彼らの社会的、経済的地位を高めるとともに、婚姻政策を通して彼らのガンビア川流域の交易ネット・ワークをより強固なものに確立していった。かくして、ダーボ商人の活動は18世紀初頭にその最盛期を迎えていたであろうとライトは推定している(注44)。

18世紀初頭、最盛期にあったダーボ商人の長距離交易の主要品目は奴隷であった。彼らはウリ国に本拠をおき、ウリ国の東方のタンダ(Tanda)地方からニジュール川にかけての地域で当時、頻発していた戦争、掠奪の戦利品としての捕虜を勝者の側から、塩あるいはガンビア川河口で仕入れたヨーロッパ製工業製品との交換で買入れた。このようにして買入れた奴隷、数百名をひきつれてキャラバン隊は、ウリ国に帰還する。そしてこの奴隷をウリ国のファタテンダ(Fatatenda)市場で売るか、そうでない場合はガンビア川河口、あるいは南に下ってカザマンス川、ゲベ川河口の市場で売るために、さらにキャラバン隊をくんで奴隷を運んでいった。ウリ国からガンビア川河口のニウミ国の市場までの300キロメートルあまりの行程に要する日数は8~10日であったという(注45)。キャラバン隊が通過する、あるいは取引を行なう諸国において彼らは王に関税を支払った。その額はさまざまであったが、概して単なる通過の場合には少額であり、取引がそこで行なわれる場合には取引額の10分の1が相場であったという(注46)。

5. マラカ

R・ロバーツ(Richard Roberts)(注47)によれば、マラカ

(Maraka またはマルカ Marka) はマリケン化したソニンケ人である。その点では、これまでに紹介したワングラ、ヤルシ、ジャハンケ、ダーボと同じである。マラカは「のちにイスラム化したソニンケ人の全般的な拡散——それによってガジャーガ・ソニンケ(Gajaaga Soninke)^(注48)、ジャハンケ、ジュラ、ヤルシなどが形成された——の一派を構成するものである。」^(注49)

マラカは今日、ニジェール川彎曲部に沿って居住しているが、ジャハンケなどがいずれも最初にジャ(またはジャハ)に定着し、そこから各地に分散、移動していったとしているのに対して、マラカの場合にはその祖先はワガドゥ^(注50)から直接に現在の居住地に移動してきたと主張しているという。

マラカも、ジャハンケなど西スーダンの他の聖職者・商人グループと同様に、自分たちが建設した都市でその地域の政治的権力から自立し自治を享受し、商業とイスラムという二つの要素を含みもっていたという。しかし他の商人グループと異なる点は、のちにみるように彼らの活動範囲がきわめて限られた範囲であったということである^(注51)。

19世紀以前におけるニジェール川彎曲部のマラカの主要な商業都市は、シンサニ(Sinsani, フランス語文献では Sansanding となっている。現在のセグ市の北北東50キロメートル)とニャミナ(Nyamina, セグ市の西南西100キロメートル)であった。そして19世紀中葉にいたって、新たにバナンバ(Banamba)、バラウエリ(Baraweli)が建設された。

ロバーツが1976年から77年にかけて現地で収集した伝承によれば、イスラムの聖職者アル・ハジ・アルファ・ママドゥ・クマ(al-haji Alpha Mamadu Kuma)が、ガーナ帝国の崩壊後(11世紀から13世紀の間)この地に渡来し、シンサニを建設した。アラビア語文献資料としては、アブデラフメン・エエサディ(Abderrahmen es-Sadi)が、1644年にこのシンサニを訪れたことを記録にとどめている^(注52)がこれがもっとも古いものであるという。しかしマラカ自身の伝承が、年代記的に一貫したものになっているのは、18世紀中葉、この時期に抬頭し勢力を拡大しつつあったバンバラ人のセグ王国にシンサニが編入された時期以降のことであるという^(注53)。

ロバーツによれば、マラカはバンバラ語でもともと「支配する人びと」^(注54)を意味している。しかしこの語が、マラカがガーナ帝国からの植民者を意味していたのか、あるいはかつての帝国の出身者という単なる称号で

あったのか、セグ王国成立以前のこの地域の歴史におけるマラカの役割を明確にする文献資料も伝承も存在しないという^(注55)。

18世紀初頭、バンバラ人のセグ王国がこの地域に建設されたことによって、この地域の経済は活況を呈するようになった。しかしクリバリ(Koulibali)王朝(約1712~52年)期にこの地域の商業の中心地はニャミナにあった。ニャミナにはサハラ岩塩が大量に流入し、またこの商人たちは、銃、火薬、馬、高級布地などと奴隷との交易を盛んに行っていたという。シンサニがニャミナにかわってセグ帝国の商業の中心地となるのは、1794年に内戦の戦乱でニャミナが崩壊したのちのことである。そして1820年代にセグ帝国とマシナ帝国との領土争いがおこり、ジェンネを中心とする交易網の南方部分が遮断されてしまったときジェンネは衰退に向い、それにかわってこの地域における商業中心地としてのシンサニの地位はさらに高まった。しかし、シンサニの商業中心地としての繁栄は短命で、1860年代初期にウマール帝国がこの地域を支配するようになった以後、シンサニは衰退に向い、その後、1880年代から20年あまりサモリ帝国の建設期に奴隷交易を通じて復興の兆しをみせたものの、結局、この地域の商業中心地は1905年までには新たに建設されたバナンバに完全に移ってしまったという^(注56)。つまり、シンサニがこの地域の商業中心地として繁栄し、マラカ商人がそこでもっとも活発に活動していた時期は、18世紀末から19世紀末にかけての約1世紀間であったわけである。

では次に、当時のシンサニに本拠をおくマラカ商人の活動の模様をみてみよう。

ロバーツによれば、シンサニのマラカ商人は三つの役割を演じていた。その第1は、乾季に家畜をひきつれ、サハラ岩塩を運搬し南下してくるムーア人に対するスラカ・ジャーティギ(Suraka jaatigi, スラカはムーア人、ジャーティギは主人の意)としての役割である。第2は、シンサニの町の周辺に造成したプランテーションにおける商品としての穀類、棉花の栽培、その棉花を利用した棉布の生産である。第3は、北にはトンプクトゥまでニジェール川をカヌーで下り、南にはろぼなどによるキャラバンを組んで商品を移動させる長距離交易である。

まず第1のムーア人に対するスラカ・ジャーティギの役割については、ロバーツは大要次のようにのべている。

シンサニのマラカ人の最大の経済的基盤は、北部から

南下してくるムーア人との交易であった。ムーア人は乾季になると南下してきて、刈入れ直後のマラカ人のプランテーションでつれてきた家畜を放牧した。家畜の糞尿は土壌の肥沃化をもたらした。またムーア人は、家畜(とくに馬)、家畜の乳、さらにサハラから運んできた岩塩を、マラカ人の生産する穀類、棉布、または奴隷と交換した。このシンサニを訪れるムーア人たちは、多くの場合、シンサニ在住の特定のマラカ人と恒常的なスラカジャータイギ関係(注57)を持っていた。彼らはシンサニ滞在中は、それぞれ自分のジャータイギのプランテーションで自分の家畜を放牧させてもらい、ジャータイギの屋敷で寝泊まりする。ジャータイギのマラカ人は、ムーア人がもち運んでくる岩塩、乾肉、デイツなどの商品の販売代理人の役割を演じた。雨季になりムーア人が北部に帰ることになると、ムーア人は売れのこった岩塩をマラカ人のジャータイギのもとに託していった。ジャータイギはムーア人から託された岩塩を雨季の価格上昇期に販売して、元手を要さず利ざやを稼ぐことができた。そのこともあって、通常、マラカ人のジャータイギはシンサニでもっとも富裕な階層を形成するようになった(注58)。

次に第2の穀類、棉花の栽培、棉布の生産についてのロバーツの説明を要約、紹介しておこう。

マラカ人はシンサニの町の周辺に造成したプランテーションで穀類と棉花の栽培を行ない、その棉花で棉布を生産していた。そのプランテーションにおける主要な労働力は奴隷であり、マラカ人は50~200人の奴隷を所有していた。数百人の奴隷を所有し、数カ所のプランテーションを経営しているマラカ人もまれではなかった。19世前半、シンサニに本拠をおき活動していたマラカ人の大商人の1人、コロママ・クマ(Koromama Kuma)は、3000人をこえる奴隷を所有していた。交易用に買入れた奴隷も、売却されるまでの期間は、このプランテーションの労働力として動員された。シンサニの綿布生産の規模を推計する手だてではないが、その規模は動員可能な奴隷労働力に依存していた。紡績は女子奴隷が、織布は男子奴隷がそれぞれ分担した。このようにして生産された穀類と棉布の余剰は、マラカ商人の交易ルートを通じて販売された(注59)。

さいごに、マラカ商人自身の長距離交易活動について、ロバーツが述べていることを要約しておこう。

マラカ商人は、すでにのべたように穀類、棉花など農業生産にも関心を払っていたので、交易の旅に出るのは収穫後の乾期の3~4カ月に限られていた。

マラカ商人の商品の輸送方法はキャラバンとカヌーであった。18~19世紀当時、西アフリカ各地ではキャラバンの活動は盛んに行なわれており、その規模は2000人をこえるものもあった。1828年、テングレラ(Tengrela)からR・カイエ(R. Caillié)が同行したキャラバンの規模は500~600人、カイエが食事をともにする班の人数は16人であったと、ロバーツは記録している(注60)。しかし彼によればマラカ商人の場合は比較的小規模で30~40人をこえることはまれであった。これはマラカ商人のキャラバンは、卸売と数少ない商品に特化していたこと、前述したように彼らの活動が乾季の3~4カ月に限られ、その間におよそ1500キロメートルを踏破しなければならぬために機動性を重んじたためであるという。キャラバンが小編成になれば、それだけ道中の危険も増大するので、マラカ商人のキャラバン隊はそれにそなえて完全に武装していた。

マラカ商人のキャラバンは一般に婦人を同行せず(カイエの同行したマリケのキャラバンには一定の役割を課せられた婦人が同行していた)、少なくとも途次の食糧は携行していた。これらはすべてキャラバンの機動性を増大させた。マラカ商人の輸送手段は主にろばであった。ただし零細な商人は、自分の頭に荷をのせて運ぶものもいた。ろばは地元で飼育され、1頭、数百K(K=クーリー、子安貝の個数、以下同じ)で調達できた(注61)。サハラ砂漠、サヘル地方で頻用されていたらくだが125~150キログラムの荷を1日35キロメートル運搬することができたのに対し、ろばの場合には70~80キログラムの荷をかなりの山道でも1日16キロメートル運搬することができたという。マラカ商人のキャラバン隊の長は、クル・クンチギ(kuru—キャラバン, kuntigi—長)とよばれ、マラブ(聖職者)がその任にあたるが多かったという。マラカ商人の場合、各地にはりめぐらされた独自のネット・ワークは保持してはおらず、系譜的にはとくに関係のない各地のジャータイギ(jaatigi)のもとに宿泊し、取引した。

マラカ商人がキャラバンによってシンサニから南部に運ぶ商品としては、地場産の棉布と、北方からシンサニに運ばれてきた再輸出品の岩塩、家畜(サモリ時代はとくに重要になった。)、干魚などであった。そして南部からは、主にコーラの実を購入してもどってきた。この交易の利益は、ロバーツの推計によれば、以下のとおりである。すなわち、シンサニで3000Kで仕入れた塩塊1本は、南部のテングレラでコーラの実、3かご(1かご

1000個入り)と交換される。このコーラの実を再びシンサニにもって来れば、1かご4000Kで売れる。つまり塩塊の仕入れに投じた3000Kの元手が、1往復の交易で1万2000Kにふえ、差引き9000Kの粗利益を上げることができる。この交易に要する費用としては輸送費と通過する各地で徴収される通行税などであるが、ロバーツはその額については推計を示していない。

つぎにカヌーによる交易についてみてみよう。カヌーは、北部の商業都市、トンブクトゥまでのニジェール川の航路で利用されていた。トンブクトゥは、シンサニ、ジェンネなどから穀類の供給をうけていた。ニジェール川を通じた大規模な穀類の交易がどの時代からはじまったかは明らかではないが、16世紀には、レオ・アフリカヌス(Leo Africanus)が、ジェンネとトンブクトゥの間にカヌーによる交易が行なわれていたことを記録している(注62)。

カヌーによる輸送は、キャラバンによる陸路輸送よりはるかに経済的で、これがシンサニの販売用穀類生産の増産を助長したものとおもわれる。たとえば、カヌーの場合、1隻平均20~30トンの荷を積載できるが、それは荷役1000人、またはらくだ200頭、あるいは牛300頭のキャラバン隊の運搬量に相当する量であったという(注63)。

利用されるカヌーの大きさは、バマコ以南の上流では1トン積みくらいの小さなものであり、バマコ以北で利用されていたものはそれよりはるかに大きく、小さいものでも6~10トン、20~30トン級のものが平均的であり、最も大きいものでは60~80トン級のものも存在した。カヌーの材質は、カルカイドラ(calcaïdra)、カリテ(karité)、エボニー(ebony)などで、釘を打たずなわで板を結びあわせて作られていた(注64)。したがって水もれがかなり激しく、水夫1人または2人が専門にその水のかいだしにあたっていたという。60~80トン級のカヌーになると専門の乗組員の数は17~18人に達した。

富裕な商人の中には、このカヌーを自ら所有しているものがいたが、普通の商人の場合には、共同で一隻を借りたり、カヌーのスペースの一部を借りて荷を運んでいた。

ロバーツは、ジェム中尉(Lt. Jaime)が1889年当時、シンサニからトンブクトゥまでのカヌー交易の諸経費について推計した記録(注65)を、ロバーツ自身の現地における聴取調査の結果にもとづいて補正したものを紹介しているが、それによると一航海の諸費用は以下のとおりである(注66)。

これは、マラカ商人6人が6~10トン級1隻を借りた事例である。

商品		
奴 隸	20人(1人 75,000K)	1,500,000K
ミレット	50袋(1袋 125kg)	
	(シンサニにおける生産価格の算定不可能)	
運賃		
奴 隸	(1人 2,000K)	40,000K
ミレット	(1袋 1,500K)	75,000K
労賃		
水 夫	2人(1人 15,000K)	30,000K
食費		
商 人	6人(1日1人250K 45日間)	67,500K
関税(10%)		
奴 隸	2人	67,500K
ミレット	5袋	150,000K
		計 1,862,500K

トンブクトゥで上記の商品は岩塩と交換される。

奴 隸	18人(1人 塩塊15本)	270本
ミレット	45袋(1袋 約2.5本)	112本

そしてシンサニまでの帰途の費用は以下のとおりである。

運賃		
塩塊	382本(0.5%)	19本
労賃		
水夫	2人(1人 15,000K)	30,000K
食費		
商人	6人分	67,500K
関税(10%)		
塩塊	363本×10%	36.5本
		計 97,500K
		+塩塊 55.5本

持ち帰った塩塊326.5本(382本-55.5本)は、1本2万Kで売られる。したがって総売上げは、653万Kとなり、これから費用合計196万K(186万2500K+9万7500K)×ミレット50袋の原価(注67)を差し引いた、457万K-ミレット50袋の原価が、このマラカ商人6人の90日間にわたる活動の利益となる。コーリー価格のたとえばフランス・フランへの換算は地域、時代によって相場が著しくことなるので困難であるという。そこでかりにこれをミレットの量に換算してみよう。シンサニで、7万5000Kで購入した奴隸が、トンブクトゥでは塩塊15本と交換されたわけであるから、塩塊1本の商人にとっての

価格は5000Kとなる。マラカ商人がトンブクトゥまで運んだミレット45袋は、112本の塩塊と交換されたというから、その価額は56万K (5000K×112)、1袋あたり約1万2400Kとなる。これをかりにミレット1袋の原価にみたてて、さきほどの総利益、457万Kを除してみると、その値は約369袋となる。つまりミレット369袋というわけである。これから当初の現物費用のミレット50袋を差し引いて319袋、マラカ商人1人当りの純益はミレット約50袋 (125kg×50=6250kg) あまりということになる。今日のミレットの生産者価格は50CFAフランぐらいであるから、これは今日の価格に換算すれば30万CFAフラン (CFAフラン≒円) となる。1商人の3カ月間の活動の成果としては、まずは順当の額というべきかもしれない。

6. コング市のジュラ商人

最後にニジェール川彎曲部から南方のコート・ジボワール、ガーナ沿岸に向う南北長距離交易ルートの中継拠点として、18世紀初頭から19世紀末まで繁栄していた商業都市のひとつ、コング市 (現コート・ジボワール国の北東部) を建設したジュラ商人について検討しておこう。これまで検討してきたワングラほかの商人グループとことなり、この地域を拠点として活動していたマンディング系の商人グループはジュラとよばれ、しかもそのジュラという語が族名的な意味合いを帯びて用いられるようになった模様である^(注68)。

1897年、サモリ軍に攻略される以前のコング市についての一次資料としては、フランス人探険家、L・G・パンジェールの『西アフリカ紀行』^(注69)がある。パンジェールは西アフリカ内陸部の踏査の途次、1888年2月、このコング市を訪れ20日間ばかり滞在し、その後ガーナ内陸部を踏査したのち、1889年1月に再びこの地に立寄り2週間あまり滞在した。

パンジェールの推計によれば、当時のコング市の人口は1万5000人、住民は「マンデ・ジュラ」人とその奴隷たちによって構成され、通用する言語は、パンジェールが精通していたバンバラ語 (第1図参照のこと) に近い「マンデ」語だけであった。

住民はすべてイスラム教徒であり市内には大モスクを含めて五つのモスクがあったが、イスラムの戒律はそれほど厳しく遵守されてはいなかった。宗教的首長のシタファ・サカノコ (Sitáfa Sakanokho) の権限は宗教・教育面に限定されており、政治の実権は政治的首長カラモコウレ・ワタラ的手中にあった。などなどの理由で、

パンジェールはコング市は宗教都市の色彩はきわめて薄いという印象をえている。

市民の生活は一般に裕福で、彼らは自分たちの奴隷を廓外に住ませ、ミレット、とうもろこしなどの食糧を栽培させるとともに、織物、染物など手工業にも従事させていたという。さらに彼らは奴隷をひきつれて年に1、2度、長距離交易の旅にでるのを常としていた。町の中央にある横500メートル、縦200メートルほどの広場には毎日、夕方になるとおよそ1000人ぐらゐの人びとが集り、市が開かれる。そして5日ごとに開かれる大市ともなると、その人数はさらに増え、祭りのにぎわいを呈したという。そこで流通している通貨は主に子安貝であり、取引されている主要な産品は、北部から運びこまれる岩塩、南部から北上してくるコーラの実であり、金の取引はわずかであった。

コング市は、この地にマンディング系の人びとが流入してくる以前から小さな集落として存在していた。しかし17世紀、パウレ王国やアシャンティ連合が支配していた南部の森林地帯とニジェール川彎曲部の商業中心地との交易が拡大するにつれて、コング地方へのマンディング系の商人の移入、定着は増大していった。そして彼らの勢力が量的に増大するにつれ、それまでのように地元民のセヌフォ族の諸首長の政治的権威下にとどまっていることに対する不満が増大した。そして18世紀はじめ、マリケ族の1リネッジ、ケイター族の未裔であると自認するセク・ワタラ (Seku Ouattara、パンジェールが会見した国王、カラモコウレ・ワタラの祖父にあたる) を指導者とする蜂起がおこり、コング市から地元民を放逐した。こうして、セク・ワタラはコング市の政治的支配権を掌中にした。

コング市の支配権を獲得したセク・ワタラは、この地域に散在するマンディング系の商人の勢力を結集して、周辺の他部族の小首長国を次々にその支配下にくみいれ、コング市を首都とするマンディング系商人＝ジュラの王国を完成した。この王国は、森林地帯からサバンナにいたる南北の交易路に沿って点々と一族のものを移住させるなどして急速に勢力拡張していき、その最盛期にはコング国の権威は北に向ってジェンネ、サン周辺にまで達していたという。しかし、セク・ワタラの死後、王位継承をめぐる内紛がおこりコングの権威は急速に失墜し、コングの支配下にあった諸地域は自立していく。パンジェールが訪れた当時のコング国の政治的支配権は、ほぼコング市だけに縮小していた。

そしてバンジュールが訪問してまもなく、フランス軍とこれに抵抗するサモリ軍との戦闘の前線となったコングは、サモリをうらぎってフランス軍に庇護をもとめたことを理由に、1897年、サモリ軍によって攻略され壊滅する。それ以後、南北ルートの交易は衰退しコングは商業都市として再建されることはなかった(注70)。

7. まとめ

以上、六つの異なった地域、時代のジュラ系商人について検討した。検討した資料は断片的であり、これら六つのジュラ系商人グループの相互関連についても不明な点が多い。しかし、以上の検討から、ガーナ帝国時代のソニケ人商人から発したとされるジュラ系商人に関して、およそ次のようなことが概括的にいえるであろう。

まず第1に、植民地化前の西アフリカにあって、彼らは少なくとも14世紀には自らを専門的商人として確立し、主にサバンナと森林部にわたる長距離交易において活動してきたということである。17世紀以降にあっては、東域のハウサ商人と西アフリカを大きく二分するかたちでジュラ系商人はその西域を自己の領域として活動してきたのである(注71)。ハウサ商人の活動領域との境界は、今日のガーナ附近であったようで、それでもこの附近から西方のセネガル、ガンビアまで、南北にはニジェール川彎曲部から、ギニア湾岸の森林部にいたる広大な領域が彼らに確保されていた。ジュラ系商人は、この広大な地域に東西南北、縦横に走る交易ルートに沿って点々と、コング市のような拠点を形成して活動を拡張していったのである。

第2に、西アフリカの政治史との関連で興味深いのは、ジュラ系商人は少なくとも19世紀末の植民地化にいたるまでは、順調に連続的に彼らの活動を拡大していったようにおもわれるのに対し、このジュラ系商人の活動の広さにみあった政治権力はこの地域には形成されることはなかったということである。ジュラ系商人の側からいえば、ガーナ帝国、マリ帝国にはじまって、各地に次々におこり滅亡していった大小さまざまな政治権力の間をぬうようにして、彼らの商業活動を持続してきたのである。とくに植民地前夜の19世紀末の状況としていえば、ジュラ系商人が活動していた地域は政治的にはきわめて零細な単位に分断されていたといえるのである。長距離交易に従事するジュラ系商人の存在と、広域を支配する政治権力の不在は、まさに植民地化前夜における西アフリカ社会の特質の一つであったといえよう。

(注1) ワンガラ商人の役割について考察した論文

として、Lovejoy, Paul E., "The Role of the Wangara in the Economic Transformation of the Central Soudan in the Fifteenth and Sixteenth Centuries," *Journal of African History*, 第19巻第2号, 1978年, 173~193ページがある。本稿のワンガラに関する情報は、主に上記論文に依拠している。

(注2) 同上論文 176ページ。

(注3) 同上。

(注4) 英、仏語文献では Yarse (複数 Yarga) とつづられているが、ここではモシ研究家、川田順造にならって「ヤルシ」としておく。川田順造『サバンナの手帖』新潮社 1981年 36ページ以下参照のこと。

(注5) Izard, Michel, "Les Yarse et le commerce dans le Yatenga précolonial," Meillassoux 編, 前掲書所収, 214~227ページ。

(注6) 川田順造『無文字の社会』岩波書店 1976年 51ページ; Fage, J. D., "Reflections on the Early History of the Mossi-Dagomba Group of States," J. Vansina; R. Manny; L. V. Thomas 編, *The Historian in Tropical Africa* 所収, ロンドン, Oxford University Press, 1964年, 191ページ。

(注7) Izard, 前掲論文, 217ページ(注2)。

(注8) 同上論文 217ページ。

(注9) 同上論文 216ページ。

(注10) 西アフリカ史の概説書にこのルートは示されていない。たとえば、Hopkins, A. G., *An Economic History of West Africa*, ロンドン, Longman, 1973年, 59ページ。

(注11) Curtin, Philip D., "Precolonial Trading Networks and Traders: Diakhanké," Meillassoux 編, 前掲書所収, 228ページ。

(注12) 同上。

(注13) 同上論文 233~234ページ。

(注14) 同上論文 233ページ。

(注15) Hodges, Cornelius, "Dispatch to the Royal African Company" (T. G. Stone, "The Journey of Cornelius Hodges in Senegambia," *English Historical Review*, 第39号, 1924年, 89~95ページに収録)。

(注16) カーティンは、繊維だけが塩または奴隷と交換可能であった (only textiles were directly exchangeable for either salt or slaves) と書いているが、それでは彼のその後の記述と矛盾するので、筆者

が本稿のように解釈した。Curtin, 前掲論文, 234ページ。

(注17) 同上論文 234~235ページ。

(注18) 同上論文 235ページ。

(注19) 同上論文 232~233ページ。

(注20) G・P・マードックによると、ワンガラはマリンケの別名として、ヤルンはモン社会に定着したマンデ系の少数者としてそれぞれ掲げられている。Murdock, G. P., *Africa, its Peoples and Their Culture History*, ニューヨーク, McGraw-Hill, 1959年, 72, 79ページ。

(注21) Curtin, 前掲論文, 228ページ。

(注22) Sanneh, Lamin, "The Origins of Clericalism in West African Islam," *Journal of African History*, 第17巻第1号, 1976年, 54~55ページ。

(注23) 同上論文 55ページ(注29)。

(注24) Sanneh, Lamin, "Slavery, Islam and the Jakhanke People of West Africa," *Africa*, 第46巻第1号, 1976年, 86ページ。

(注25) 本稿第II節 (注2)参照のこと。

(注26) Sanneh, "The Origins……," 56ページ。

(注27) 同上。

(注28) 同上論文 59ページ。

(注29) Curtin, 前掲論文, 230ページ。

(注30) Sanneh, "The Origins……," 67ページ。

(注31) 同上論文 60ページ。

(注32) 同上論文 68ページ。

(注33) 同上論文 63ページ。

(注34) 同上論文 60ページ。

(注35) Wright, Donald R., "Darbo Jula: The Role of a Mandinka Jula Clan in the Long-Distance Trade of the Gambia River and Its Hinterland," *African Economic History*, 1977年春季号, 33~45ページ。上記論文には、著者が具体的にどのような聴取調査を行なったのかその詳細は記されていないが、注記として著者が面接、聴取を行なったアル・ハジ・ラミン・ダーボ (Al Haji Lamin Darbo) ほか、6名の情報提供者の氏名が付されている。

(注36) 同上論文 33ページ。

(注37) ライトは、英語で書かれた上記論文では表題 [(注35)を参照のこと] にもあるとおり、ダーボが属する族名はマンディンカであるとしているが、同論文に附された伝語の要約では、マリンケの1クラン

(un clan malinké) となっている。つまり、ライトの用語法ではマンディンカとマリンケは、同一の族を指しているものと推測される。また本文中の記述においても、ライトのいうマンディンカは、本稿で採用しているバードの分類によるマンディンカよりマリンケに近い意味で、あるいは少なくともマリンケを含んだ意味合いで用いられているようにおもわれる。そこで本稿では、ライト自身がフランス語ではマリンケとしていることでもあり、ライトがマンディンカとしているところは、マリンケと修正しておく。

(注38) このフォファナという氏は、前項でとりあげたジャハンケの聖職者アル・ハジ・サリの子息の1人で、ジャハ・パンブクの商業を司った一族の名としてでてくるが、両者にどのような関係があるのか、その点を明らかにする資料は、これまでのところ入手しえていない。

(注39) Wright, 前掲論文, 37ページ。

(注40) 同上。

(注41) 同上論文 37~38ページ。

(注42) 同上論文 39ページ。

(注43) 1734年のイギリスの記録 ("Accounts and Charges, James Fort, River Gambia," ロンドン, Public Record Office, 1734年, T. 70/1451, 232~258ページ) によれば、ジュフル在住のブラム・セ・ダーボ (Bram se Darbo) は、ニウミに在住し商業を営んでいたヨーロッパ人との混血の婦人実業家シラ・ベアレ (Sira Beare) と、ニウミ国王ドス・コリ・ソンコ (Dusu Koli Sonko) との間に生じた係争を調停した。サルーム国王が、サルーム川を航行中の英国船を拿捕したとき、ジェームズ島の英国基地はジュフル在住のスレイマン・ダーボ (Sulayman Darbo) に対して船舶と乗組員の返還のための交渉を依頼し、彼はそれに成功した。Wright, 前掲論文, 39ページ。

(注44) 同上論文 40ページ。

(注45) 同上論文 40~41ページ。

(注46) 同上論文 40ページ。

(注47) この項のマラカに関する記述は、R・ロバーツの下記の論文に主に依拠している。Roberts, Richard, "Long Distance Trade and Production: Sinsani in the Nineteenth Century," *Journal of African History*, 第21巻第2号, 1980年, 169~188ページ。

(注48) ガジャーガ・ソニンケとはどのような性格

のグループであるのか、ロバーツの論文にも説明がなく不詳である。

(注49) Roberts, 前掲論文, 170ページ。なおG・P・マードックは、マラカをマルカ (Marka) と表記し、ソニンケ・グループに含めて分類している。Murdock, 前掲書, 72ページ。

(注50) ソニンケ人の伝承に登場するワガドウ国は、アラビア語文献に登場するガーナ帝国であろうという推測が今日、定説化しつつあるが、まだ確定されるにはいたっていない。本稿, 第II節(注2)参照のこと。

(注51) Roberts, 前掲論文, 171ページ。

(注52) Abderrahmen ben Adullah ben Imram ben Amir es Sa'di 著, O. Housas 仏訳, *Tarikh es-Soudan*, パリ, 1931年, 68ページ (Roberts, 前掲論文, 171ページより孫びき)。

(注53) Roberts, 前掲論文, 171ページ。

(注54) ただしドラフォス(Delafosse)は、マラカとは、もともと「川のない広がり」という意味であるが、ここでは具体的にはサヘル地域を意味する「マラ」に「人びと」を意味する接尾語「カ」がついたもので、「サヘルの人びと」という意味であるとしている。Delafosse, M., *La langue mandingue et ses dialectes*, 第2巻, パリ, 1955年, 489ページ (Person, 前掲書, 第1巻, 124ページ(注27)より孫びき)。そしてベルソンによれば、このマラカという語は、マリ帝国時代以降、ハウサ商人を意味するマラバ (Maraba) と対置して、エジエール川上流出身の商人全体を指すようになった。Person, 前掲書, 第1巻, 96ページ。

(注55) Roberts, 前掲論文, 171~172ページ。

(注56) 同上論文 172ページ。

(注57) 前項には触れなかったが、D・R・ライトは、マラカ商人の場合、南下するモール人との間で成立しているスラカ・ジャーテイギと同様のシステムが、セネガンビア地域に存在していたことを指摘している。ただし、そこではスルガ(Suruga)とよばれ、またジャーテイギとの関係でより自立性の強い客人としてサマラン(samalan)という範疇もあるという。なおシンサニというスラカとセネガンビアにおけるスルガは同じ語であるとおもわれるが、ロバーツがスラカはムーア人という意味であると説明しているのに対し、ライトはスルガは客人という意味であるとしている。Wright, 前掲論文, 36~37ページ; Roberts, 前掲論

文, 174ページ。

(注58) Roberts, 同上論文, 174ページ。

(注59) 同上論文 173ページ。

(注60) Caillié, René, *Journal d'un Voyage à Tombouctou et à Jenne*, パリ, 1830年, 第2巻, 103, 115~116ページ (Roberts, 前掲論文, 176ページより孫びき)。

なおこのR・カイエの旅行記の内容は川田順造が下記の書で一部、紹介している。川田順造『サバンナの手帖』101~114ページ。

(注61) これは、ロバーツが、現地セグで聴取した情報にもとづいたものであるが、1828年、カイエが同行したキャラバンは、現地で1頭1万1000コーリーの価格で購入している。また1880年には、セグ市におけるろば1頭の価格は4万コーリーであったという記録もある(Gallieni, J. S., *Voyage au Soudan français: Haut-Niger et pays de Ségou*, パリ, 1885年, 437ページ)。この大幅な価格の差異の理由は、ロバーツも不明であるとしている。Roberts, 前掲論文, 178ページ。

(注62) Leo Africanus 著, A. Epallard 仏訳, *Description de l'Afrique*, パリ, 1956年 465ページ (Roberts, 前掲論文, 183ページより孫びき)。

(注63) 1897年, デュボワ (P. Dubois) が行なった推計, Dubois, F., *Tombouctou la Mystérieuse*, パリ, 1897年, 191ページ (Roberts, 前掲論文, 183ページより孫びき)。

(注64) このカヌーの構造については、川田順造の著書において、カイエの記述が紹介されている。川田『サバンナの手帖』118~119ページ。

(注65) Jaime, Lt., *De Koulikoro à Tombouctou sur la canonnière 'le Mage'*, パリ, 1894年, 218ページ (Roberts, 前掲論文, 184~185ページより孫びき)。

(注66) Roberts, 前掲論文, 185~186ページ。

(注67) ロバーツは、ミレット50袋の原価は算定不可能として価額を示さず、そのまま費用計算からも落しているが、これは明らかな誤りであろう。

(注68) 今日、コート・ジボワールの公式統計では、かつてのロング市を含むコロゴ地方の住民の族名としてセヌフォとともじジュラをあげている。

1962年の調査によると、両者の人口はセヌフォ人24万人に対してジュラ人は5万8000人と推計されている。Ministère des Finances, des Affaires économi-

ques et du Plan, *Région de Korhogo: Etude de développement socio-économique: Rapport Démographique*, パリ, SEDES, 1965年, 11ページ。

(注69) Binger, L. G., *Du Niger au Golfe de Guinée par le pays de Kong et le Mossi*, パリ, Librairie Hachette et Cie., 1892年。本書については、その内容の一部を、筆者が『アジア経済』誌上に紹介したことがある。原口武彦「L・G・バンジュール著『西アフリカ紀行——ニジュール川からギニア湾まで——』(資料紹介)。(『アジア経済』第15巻第10号1974年10月 65~83ページ)。

(注70) Person, Yves, "Samori and Resistance to the French," Rotberg, R. I.; Ali A. Mazrui 編, *Protest and Power in Black Africa* 所収, ニューヨーク, Oxford University Press, 1970年, 108ページ。

(注71) 19世紀におけるジュラ系商人とハウサ商人の活動領域については, Adamu, Mahdi, *The Hausa Factor in West African History*, ザリア, ナイジェリア, Ahmad Bello University Press, 1978年を参照のこと。

IV おわりに

以上、今日、コート・ジボワールのアビジャン市を中心として活動しているジュラ商人の系譜を辿ってきた。

しかし、それは資料的な制約もあって、植民地化前夜までの時期にとどまった。彼らが植民地化以降の過程にどのように自らを適応させ今日にいたったのかという経過については考察することができなかった。それは、今日における彼らの活動の実態分析とともに残された課題として今後、検討していきたいと考えている。ただ現在の時点でいえることは、14世紀来の長距離交易の中で専門的商人として活動してきたジュラ系商人は、植民地時代を経て独立を達成したコート・ジボワール国という今日の状況の中で、新たに一つの経済勢力として蘇生し、抬頭しつつあるということである。

その彼らが、今日、国家と外国資本を主な担い手として推進されつつある経済開発の過程において、どのような役割を果そうとしているのか、これまた今後の課題として残されるが、本稿はそのような課題に挑むための準備作業の一つとして、ここで一応しめくくっておくことにする。

(アジア経済研究所在コート・ジボワール海外調査員)